

東京都及び区市町村教育委員会指導主事等による

東日本大震災被災地視察研修

報告書



平成24年6月

東京都教育委員会

はじめに

東京都教育委員会は、東日本大震災を踏まえ、小・中学生向けに新たな防災教育補助教材「3. 11を忘れない」を平成24年1月に発行し、都内公立小学校5年生と同中学校2年生の全児童・生徒に配布いたしました。本補助教材は、配布直後から大きな反響を呼び、多くの校長や教育委員会関係者から「防災教育の学習に活用できる」との評価をいただきました。同時に、本補助教材には被災地の児童・生徒の作文や絵が掲載されていることから、「教材を活用する上で、作品が掲載されている児童・生徒の学校の被害状況や町の復興状況等を知りたい」という要望も寄せられました。

そこで平成24年5月22日から24日にかけて、東京都及び区市町村教育委員会の指導主事等が、「3. 11を忘れない」に掲載されている教材に関係する宮城県石巻市、東松島市及び福島県いわき市の学校等を訪問し、津波による被災状況や復旧・復興の状況をじかに見るとともに、「自助・共助・公助」の具体的な事例について、学校関係者や保護者・地元の方に直接話を聞くことで、東日本大震災を踏まえた実践的な防災教育を推進するための視察研修を実施いたしました。

本視察研修を実施する上で、石巻市教育委員会、東松島市教育委員会、東松島市立宮戸小学校、東松島市立大曲小学校、航空自衛隊松島基地、株式会社石巻日日新聞社、宮城県立石巻高等学校、いわき市教育委員会、いわき市立湯本第二中学校、いわき市消防本部及び財団法人福島県観光物産交流協会の皆様をはじめ、講師の皆様には、熱心な御指導と様々な御配慮を賜りました。

また、石巻市教育委員会元教育長 阿部和夫様、石巻市立門脇小学校前校長 鈴木洋子様、いわき市立湯本第二中学校長 澤井史郎様には、「3. 11を忘れない」に児童・生徒の作品を掲載する際に、各学校を御紹介していただいたことはもとより、今回の視察研修においても、視察先や講師を御紹介いただき、さらに御自身にも御講演をいただきました。心から感謝申し上げます。

本視察研修の成果は、参加した指導主事等が、実際に被災地に立ち、じかに地元の方の話を聞き、その状況を体感したことにより、具体的な取組を伴う日常のより実践的な防災教育の必要性について強く認識したことです。さらに、被災した校舎など津波の爪跡から実感した自然の脅威、子供たちを安全な場所に避難させた校長の決断力、消防署員や自衛隊員の献身的な救助活動、風評被害に立ち向かう人々の苦難等について知ることで、各地区の防災教育改善の方向性を見出すことができました。

本報告書は、3日間の視察研修の概要をまとめたものです。この報告書とともに、被災地の状況を撮影した動画や写真約250枚と、各講演会で講師の先生方が使用された資料、講演記録等の電子データを電子書籍としてDVD1枚にまとめた指導資料を作成・配布いたします。本報告書及び指導資料を、各区市町村教育委員会で指導主事等が伝達研修を実施する際や、各小・中学校で「3. 11を忘れない」を活用する授業の際の視聴覚教材として、さらに都立高等学校における宿泊防災訓練等の場面で活用し、東京都の各学校が首都直下地震に備え、実践的な防災教育を一層推進することを期待しています。

平成24年6月29日

東京都教育庁指導部長

坂本和良

目 次

講師一覧	1
視察研修の概要	2
視察研修記録	4
平成24年5月22日(火)	
講演1 「東日本大震災と航空自衛隊松島基地」	4
視察1 「石巻市立門脇小学校 東日本大震災当日の避難経路」	6
講演2 「東日本大震災 その時 学校は」	8
講演3 「手書きの壁新聞と、教育に期待すること」	10
講演4 「東日本大震災に思う」	12
平成24年5月23日(水)	
視察2 石巻市雄勝・北上・河北地区	14
視察3 石巻市牡鹿地区、女川町	16
講演5 「東日本大震災での体験及び震災対応」	18
講演6 「震災時の対応、避難所運営、震災後の対応について」	20
平成24年5月24日(木)	
講演7 「3.11震災時の消防活動について」	22
講演8 「避難所としての学校の役割」	24
講演9 「東日本大震災 被災体験から ～学校管理者として～」	26
講演10 「福島県の現状と再生に向けて～風評被害に係る分析と対策～」	28
今後の防災教育の改善に向けて 〈参加者の声〉	30
参加者名簿	32

番号	講演・視察	所属・職名等	氏名
1	講演1	航空自衛隊松島基地 第四航空団司令部監理部 渉外室長・広報班長	大泉 裕人
2	視察1・講演2	石巻市立門脇小学校 前校長	鈴木 洋子
3	講演3	株式会社石巻日日新聞社 常務取締役	武内 宏之
4	講演4・視察3	石巻市教育委員会 元教育長	阿部 和夫
5	視察2	石巻市教育委員会 元学校教育課長	阿部 邦英
6	講演5	東松島市立宮戸小学校 校長	日下 嘉充
7	講演5	東松島市立宮戸小学校 教頭	鍵 頼信
8	講演5	東松島市立宮戸小学校 教諭	宮崎 敏明
9	講演5	宮戸小学校仮設住宅自治会 会長、 宮戸島大浜区長	佐藤 康男
10	講演6	東松島市立大曲小学校 校長	亀卦川孝雄
11	講演6	東松島市立大曲小学校 教諭	門脇 雅孝
12	講演6	東松島市立大曲小学校児童の祖父 東松島市自主防災連絡協議会 幹事	菊池 和夫
13	講演6	東松島市スクールカウンセラー（岐阜県教育委員会から派遣）	早川 千恵子
14	講演7	いわき市消防本部常磐消防署 署長	黒澤 正明
15	講演8	いわき市立湯本第二中学校 校長	澤井 史郎
16	講演8	いわき市立湯本第二中学校 教頭	松本 仁志
17	講演9	いわき市立四倉中学校 前校長	木村 秀子
18	講演10	財団法人福島県観光物産交流協会観光部 統括部長	黒澤 文雄

視察研修の概要

1 目的

東京都の指導主事等が、小・中学校版防災教育補助教材「3. 1 1を忘れない」に掲載されている教材に関する被災地の学校等を訪問し、震災当日の被災状況や復旧・復興の状況を理解するとともに、「自助・共助・公助」の具体的な事例を収集する。また、学校関係者や保護者・地域住民等に直接話を聞くことで、東日本大震災を踏まえた都及び区市町村教育委員会における実践的な防災教育を推進するための見識を高める。

2 実施日

平成24年5月22日(火)から5月24日(木)まで(2泊3日)

3 参加者

東京都教育委員会指導主事等 12名 区市町村教育委員会指導主事等 51名

4 訪問先・宿泊先

第1日目については、参加者全員が同じ訪問先を視察し、講演を聞いた。第2日目以降は、A B 2班に分かれて視察し、講演を聞くことで、研修の機会を増やした。

(1) 平成24年5月22日(火)

ア 訪問先

○航空自衛隊松島基地 ○石巻市立門脇小学校 ○石巻市日和山公園
○宮城県立石巻高等学校 ○株式会社石巻日日新聞

イ 宿泊先 松島センチュリーホテル(宮城県松島町)

(2) 平成24年5月23日(水)

ア 訪問先

A班

○石巻市雄勝・北上・河北地区【雄勝小学校、雄勝総合支所、相川小学校及び大川小学校】
○東松島市立宮戸小学校・同小学校仮設住宅

B班

○石巻市牡鹿地区【石巻市桃浦・洞仙寺、谷川小学校】、女川町
○東松島市立大曲小学校

イ 宿泊先 小名浜オーシャンホテル(福島県いわき市)

(3) 平成24年5月24日(木)

ア 訪問先

共通 ○いわき市消防本部常磐消防署 ○郡山市民プラザ

A班

○いわき市立湯本第二中学校 ○いわき市豊間地区【豊間中学校、塩屋崎灯台】

B班

○いわき市四倉・久之浜地区【四倉中学校、いわき市平消防署四倉分署、久之浜第一小学校】

5 研修形態

- (1) 津波被害があった沿岸部の町や学校施設等の視察見学
- (2) 被災した小・中学校の校長等教職員や、スクール・カウンセラーの体験談等、講演会
- (3) 地元新聞の記者や保護者、仮設住宅自治会長等地域住民の体験談及び講演会

等

6 視察研修行程概要

第1日目 5月22日(火)	第2日目 5月23日(水)	第3日目 5月24日(木)
11:15～ 13:45	8:45～ 12:10	9:00～ 9:50
航空自衛隊松島基地 講演1 松島基地 広報班長 大泉 裕人氏 ○隊員との会食(隊員食堂) ○基地内見学(バス車中)	石巻市雄勝地区等の視察 A班 視察2 講師 石巻市教育委員会 元学校教育課長 阿部 邦英氏 宿舎→雄勝小学校(車中) →石巻市雄勝総合支所(庁舎前 の復興商店)→相川小学校→ 大川小学校	いわき市常磐消防署 講演7 常磐消防署 署長 黒澤 正明氏
14:00～ 15:10	石巻市立門脇小学校周辺 視察1 講師 門脇小学校 前校長 鈴木 洋子氏 門脇小学校校舎視察→ 日和山公園→ 鹿島御児神社→ 県立石巻高等学校	10:05～ 11:50
	石巻市牡鹿地区等の視察 B班 視察3 講師 石巻市教育委員会 元教育長 阿部 和夫氏 宿舎→桃浦・洞仙寺→谷川小 学校→女川町	いわき市立湯本第二中学校 A班 講演8 湯本第二中学校 校長 澤井 史郎氏 教頭 松本 仁志氏
15:15～ 15:50	13:05～ 15:45	10:00～ 10:40
県立石巻高等学校 講演2 門脇小学校 前校長 鈴木 洋子氏	東松島市立宮戸小学校 A班 講演5 宮戸小学校 校長 日下 嘉充氏 教頭 鍵 頼信氏 教諭 宮崎 敏明氏 宮戸小学校仮設住宅自治会 長・大浜区長 佐藤 康男氏	いわき市常磐消防署 B班 講演9 いわき市立四倉中学校 前校長 木村 秀子氏
15:55～ 16:40		11:50～ 12:30
講演3 株式会社石巻日日新聞社 常務取締役 武内 宏之氏	13:00～ 15:40	いわき市豊間地区視察 A班 湯本第二中学校→いわき市 豊間地区(車中)→いわき市 立豊間中学校(プール脇及 び校門から視察)→塩屋崎 灯台下
16:50～ 17:10	東松島市立大曲小学校 B班 講演6 大曲小学校 校長 亀卦川 孝雄氏 教諭 門脇 雅孝氏 スクール・カウンセラー 早川 千恵子氏 大曲小学校児童の祖父・ 東松島市自主防災連絡協議会 幹事 菊池 和夫氏	10:45～ 12:30
株式会社石巻日日新聞社 (車窓) 石巻市内視察(車窓) 東松島市沿岸部視察(車窓)		いわき市四倉地区視察 B班 常磐消防署→いわき市四倉 地区(車中)→久之浜第一小 学校(校地内の復興商店街 も視察)→いわき市平消防 署四倉分署(車中)→道の駅 「よつくら港」
18:15～ 19:15	15:50～	15:15～ 16:00
松島センチュリーホテル 会議室 講演4 石巻市教育委員会 元教育長 阿部 和夫氏	(福島県へ移動)	郡山市民プラザ会議室 講演10 財団法人福島県観光物産 交流協会 統括部長 黒澤 文雄氏
		16:00～ 16:30
		研修のまとめ 指導部主任指導主事 石田 周 指導企画課課務担当係長 西脇 良和

7 視察研修の成果について

参加した指導主事等が、実際に被災地に立ち、じかに地元の方の話を聞き、その状況を体感したことにより、具体的な取組を伴う日常のより実践的な防災教育の必要性について強く認識することができた。さらに、

- 被災した校舎など津波の爪跡から実感した自然の脅威
- 子供たちを安全な場所に避難させた校長の決断力
- 消防署員や自衛隊員の献身的な救助活動
- 風評被害に立ち向かう人々の苦難

等について知ることによって、都内各地区の今後の防災教育改善の方向性を見出すことができた。

視察研修記録

講演1 「東日本大震災と航空自衛隊松島基地」

講師 第四航空団司令部監理部 渉外室長・広報班長

大泉 裕人 氏



大泉 裕人氏

日時：平成24年5月22日(火) 11時15分から13時45分まで

会場：航空自衛隊松島基地会議室、隊員食堂、基地内諸施設

1 研修のねらい(訪問の概要)

小・中学校版「3.11を忘れない」には、被災地で救助活動に当たる自衛隊の活躍が紹介されている。松島基地を訪問することで、松島基地の被災当日の状況や、組織的危機管理の在り方と判断、公助としての自衛隊の対応と役割等について学ぶ。

(1) 挨拶

航空自衛隊松島基地 基地司令 谷井 修平 氏

(2) 講演 「東日本大震災と航空自衛隊松島基地」

渉外室長・広報班長 大泉 裕人 氏



講演の様子

(3) 航空自衛官との懇談

10班に分かれ、班ごとに1名の航空自衛官と会食した。大震災当日の状況や日常の訓練等について、自衛官から体験談等を伺った。



航空自衛官との会食

(4) 基地内見学(バス車中)

津波到達の跡や、飛行場の被災状況について視察

2 講演の概要

★講演記録を「指導資料(DVD)」に収録

(1) 東日本大震災当日の対応

これまで、本基地は、周辺地区住民と良好な共存共栄の関係を築いてきており、今回の震災においても、積極的に被災地支援に取り組んだ。

3月11日14時46分に地震発生。その後も数分の間に幾度もの余震があったため、飛行機に触ることもできない状況だった。貴重な飛行機を津波から守るためには上空に退避させるしかない。しかし、それには、少なくとも30分はかかる。14時56分、基地司令は様々な要素、状況を考慮した上で、飛行機等を上空に退避させることを断念し、隊員全員を隊舎屋上に避難させる決断をした。その結果、基地内にいた隊員は全員無事だった。

基地に津波が到達したのが15時54分、地震発生から1時間8分後であり、結論から言えば数機の飛行機を飛ばすことができたとも考えられる。しかし、それによって何名かの隊員の命が失われたかもしれない。危機対応時、何よりも人命を優先に対応することが重要であると考える。



津波で浸水した格納庫

(2) 松島基地の災害支援活動

3月12日、基地は被災地への災害派遣活動・支援を始めるとともに、飛行場内の泥や瓦礫^{がれき}の撤去を開始した。

- 航空輸送基地としての活動：3月13日から7月31日まで、救援物資1,600トンを空輸
- 甚大な被害を受けた石巻市北上・雄勝・牡鹿等に救援物資を空輸：17地点42回
〔搬送物資〕米1,800kg、乾パン336袋、カップ麺1,820箱、非常用食料4,328食
- 医療支援：3月15日から6月8日まで、東松島市及び石巻市の避難所29箇所を巡回診察
延べ1,878名の被災者のケアを実施
- 断水地域に給水車を使っての給水支援：5月28日まで、給水量2,115t
- 住民生活支援：3月19日から5月1日まで、被災家屋1,269軒の瓦礫等撤去作業
- 食料支援：3月20日から5月8日まで、おにぎり等炊き出し14,764名に実施
- 陸上自衛隊・米軍と共同活動：4月4日から18日まで、小学校等復興支援を実施
- 身元の判明した遺体を遺体安置所に搬送：3月21日まで、637体を収容
- ブルーインパルス隊員による小学生へのお菓子等のプレゼントや音楽隊演奏支援 等

(3) 組織的危機管理について

自衛隊の活動とは、最悪の事態を想定した組織的危機管理、恒常的訓練である。

何かが起きたときにどうすべきか、組織的に危機管理を行うことが重要であり、学校でも参考にいただければと思う。緊急事態が発生したときに、まず何が起きているのか、どこで起きているのか、最悪の事態は何だろうと考えることが大切である。この部分が抜けたまま活動すると対応を誤ってしまうこととなる。

次に、何ができるか対応策を検討する。その中で最も適したこと、必要なことについて方針を決定し、どうすればよいかを考える。

最後に、命令を発する。命令は関係者全員の意思を共有するというものである。後は行動を開始するのみである。

組織的危機管理とは・・・

- | | |
|-------|-------------------|
| ①状況把握 | 何が発生？5W1H、最悪事態？ |
| ②可能行動 | 何ができる？人・物・場所・金・・・ |
| ③方針決定 | 目的・最適方法・不安全要素 |
| ④準備 | 実行・安全確保に何が必要 |
| ⑤命令 | 全員の理解（納得） |
| ⑥実行 | 行動開始 |
| ⑦監督 | 助言、訂正 |

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 島しょ教育においては、町や村をあげての防災訓練が毎年実施されており、自衛隊が参加する年もある。特に新島村には、防衛省技術研究所の支所があることから、村の防災会議の他、学校行事等にも支所長が参加し、恒常的に情報交換、連携を図っている。また、今年度は、海上自衛隊が戦時中の不発弾処理の為に島を訪れる際、停泊する船に小学生が社会科見学として乗船体験をしている。児童は船内見学の他、自衛隊の仕事について、また、東日本大震災における支援活動の実際の様子についてなど、直接話を聞くことができ、学びを深めている。今後、このようなかわりをさらに生かし、災害時の避難所における心構え等、自助・共助・公助について意識啓発等を図る場を、町や村と検討していきたい。

【東京都教育庁大島出張所指導主事(新島村教育委員会併任) 幅 健司】

- 通常の教育活動のみならず、特に非常の際、困難な状況の際には、最高責任者である校・園長の決断が、何よりも重要であり、必要である。非常の際には、体が自然に反応する、動くといったレベルまで、取るべき行動を身に付けておく必要がある。そのための事前訓練として、月1回、避難訓練や安全指導を繰り返し行うことに意義がある。

【千代田区教育委員会指導主事 山本 一之介】

- 被災した方々が口をそろえて「自衛隊に大変お世話になった」「ありがたかった」とおっしゃっていた理由が分かった。特に、現場で救護活動に当たられた隊員から、直接お話を伺えたことが貴重だった。

【八王子市教育委員会指導主事 田島 由紀子】

視察1 「石巻市立門脇小学校 東日本大震災当日の避難経路」

講師 石巻市立門脇小学校 前校長 鈴木 洋子 氏

日時：平成24年5月22日(火) 14時00分から15時10分まで

場所：石巻市立門脇小学校、同市立女子高等学校、日和山公園

鹿島御児神社、宮城県立石巻高等学校



鈴木 洋子氏

1 研修のねらい

石巻市立門脇小学校 前校長 鈴木洋子氏の案内により、東日本大震災当日の石巻市立門脇小学校児童等の避難経路を実際に歩くことで、緊急対応時の管理職の判断等について学ぶ。

2 門脇小学校の紹介、当日の状況等

門脇小学校は、日和山(標高56.4m)を背に、太平洋から800m、旧北上川から500m離れた山際の地、標高10mに位置している。大津波は、校舎南側の石巻港と、東側の旧北上川の二方向から襲ってきた。校舎は大津波により大破し、その後炎上。震災時の学級数は、普通学級12、特別支援学級2、児童数は300人だった。

地震発生時、1・2年生は5校時で下校。3年生から6年生までは6校時終了直前であり、校内にいた児童242人は、裏の日和山に避難して無事であった。自宅にいた児童、及び下校途中の児童ら74人は家族や地域の方とともに学校に戻り、校庭で第一次避難をしていた児童と合流し、一緒に日和山へ登った。児童の犠牲者は7人で、これらの児童は、保護者や祖父母とともに津波の犠牲となった。欠席児童1名もその中に含まれている。

鈴木前校長は、発災直後、先頭に立って教員に指示を出し、校庭から学校の裏山に位置する石巻市立女子高校を經由して日和山へと向かった。その後、状況に応じて、鹿島御児神社、県立石巻高等学校へと避難場所を変えながら、より安全な場所へと子供たちを導いていった。



石巻市立門脇小学校

3 実際に避難経路を歩く

[★門脇小学校周辺を撮影した動画・写真を「指導資料\(DVD\)」に収録](#)

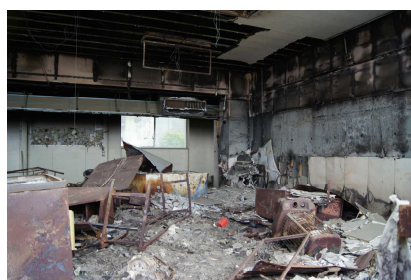
歩き始める前に、研修参加者全員が門脇小学校の校庭で、鈴木前校長から門脇小学校の紹介、当日の状況、被災1年2か月後の校舎の状況等について説明を受けた。その後、鈴木前校長の先導していただき、3月11日当日の様子を思い浮かべながら避難経路を歩いた。

(1) 地震発生・第一次避難(校庭)

3月11日14時46分。これまでに経験したことのない、強く、激しく、長い揺れに襲われた。校舎倒壊を恐れ、校庭への一時避難を鈴木前校長は命じた。このとき既に放送機器は使用できず、教頭・教務主任が二手に分かれて避難指示を出した。15時に、一次避難が完了した。



被災後に出火した門脇小学校



全焼した校長室



校舎の裏にある日和山

(2) 大津波警報発令・第二次避難(日和山公園)

その後、大津波警報が発令された。すぐさま鈴木前校長は、訓練どおり日和山へ第二次避難を開始するように指示する。全校児童が2列になって移動。「上がれ、上がれ、早く上がれ」と子供たちを励ましなが、第二次避難場所である石巻市立女子高校(標高40m)を目指した。通常の訓練はここで終了だが、当日は地域の人々の避難の妨げにならないように、かつ細い道で止まると児童の掌握が困難となることから、隣接する日和山公園へ向かうことを決断する。



校庭を出て、市立女子高校を目指す。



児童等が駆け上がった校舎横の階段



市立女子高校前の道路

(3) 大津波襲来・鹿島御児神社へ

津波が押し寄せたのは、日和山公園到着後、約30分が経過した15時50分頃。前方の海面が盛り上がり、ゴーという地鳴りのような音をたて、南側の太平洋側と東側の旧北上川の二方向から、大津波は壁となって押し寄せた。炸裂した波頭は、あたかも日和山公園にいる児童らを襲うように思われた。そこで、鈴木前校長は、さらに高い場所にある鹿島御児神社へと児童を避難させた。

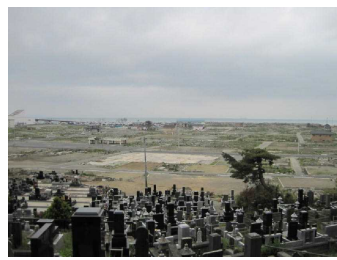
神社の境内に移ると、風や雪はますます強くなってきた。ここで、集まってきた保護者に児童を引き渡したが、その際に役立ったのが、初任3年目の教員が持参していた全校児童名簿だった。この名簿で確認することにより、確実に児童を保護者に引き渡すことができた。



雪が降る中、待機した日和山



保護者に児童を引き渡した鹿島御児神社



日和山から石巻港を見下ろす

(4) 引き渡し・石巻高校へ(三次避難)

保護者に引き渡すことができなかった児童40人と教職員21人の計61人が、避難する場所を探し回った。その結果、県立石巻高等学校へと向かう。同高校での避難生活はそれから10日間続いた。

4 今後の防災教育の改善等に向けて

- 登下校中の災害発生を想定した場合、安全確認や教職員の動きが通常の避難想定と異なるため、児童・生徒の安否確認の方法について確認する。また、登下校時の避難方法については、保護者・地域の理解・協力を得る必要があることから、保護者会等で周知を図る。

【新宿区教育委員会指導主事 波多江 誠】

- 避難場所を判断する際のスピードと的確さの重要性を実感した。避難の際に、防寒対策のブルーシートや名簿を携行した教員の機転が功を奏したことから、災害に対する平素の意識付けの重要性を感じた。

【練馬区教育委員会指導主事 三沢 亘潤】

- 一次避難、二次避難、三次避難と、次々に高台へ避難させるための指示や引き渡し場所の決定等、少ない情報の中から最善の方法を選択しなければならないケースがあることを校長に周知するとともに、危機管理マニュアル等の改善を図っていく。

【瑞穂町教育委員会指導主事 辻 和夫】

講演2 「東日本大震災 その時 学校は」

講師 石巻市立門脇小学校 前校長 鈴木 洋子 氏

日時：平成24年5月22日(火) 15時15分から15時50分まで
会場：宮城県立石巻高等学校 視聴覚室

※講演会場は、宮城県立石巻高等学校 校長 三国清美氏の御厚意でお借りした。



鈴木 洋子氏

1 講演のねらい

東日本大震災当日の石巻市立門脇小学校児童等の避難経路の現地踏査に引き続き、同校前校長の鈴木洋子氏から「石巻の地理と歴史」「あの日・あの時のこと」「学校づくりで大切にしてきたこと」「震災に遭って思うこと」の4点について直接、話を伺うことで防災教育の在り方を考える。

2 講演の概要

★講演記録の詳細とプレゼンテーション、写真を「指導資料(DVD)」に収録

(1) 石巻の地理と歴史

石巻市は平成の大合併で六つの町が合併して、現在の石巻市となった。震災前の2月の人口は、16万2千人。今年4月時点で、15万2千人。1万人減である。

市内を流れる北上川は、岩手県の岩手郡の「弓弭の泉」を源泉として南下し、宮城県で二つに分かれる。一つは追波湾に注ぐ北上川。もう一つは慶長遣欧使節として支倉常長が乗ったサン・ファン・パウティスタ号がある石巻湾に注ぐ旧北上川。門脇小学校は、東の旧北上川から500m、南の太平洋から800mの地点に位置している。旧北上川は上流で三つの川を合わせ、水量を増やし、米を積む船が通るようにしたものである。運んできた米は、門脇地区で積み替えて、東回り航路で江戸に送られた。江戸の米の三分の一、あるいは半数は伊達藩の米だったとも言われている。

私はこれまで、校長として、卒業までの1月から3月初めにかけて6年生5、6人ずつグループを組み、昼食とお茶会をした。そのとき、「あなたたちは、こういう歴史のある土地に育ったのだから、ここの土地を背負って立つ人間になろうね」という話をしてきた。あの3月11日も、その会食を終えた後のことだった。

(2) あの日・あの時のこと

この写真は、被災してから3日目の様子である。校舎の1階まで、家々や車が流れ着き、瓦礫でいっぱいだった。この瓦礫の山を自衛隊の方々がきれいに片付けてくださった。これらを全て撤去するには5月頃までかかったと思う。震災前の門脇町・南浜町地区は1,700世帯、およそ5,000人を超える人たちが住んでいた。被災後にたくさんの瓦礫があったときもとても辛かったが、片付けて何にもない、今の更地の状態も胸が痛む思いがする。

あの日々の避難経路は、第一次避難が校庭、第二次避難は日和山公園、次に児童を保護者に引き渡した鹿島御児神社、そして、最後にたどり着いた宮城県立石巻高等学校である。



講演会資料「3月13日の門脇小学校」

(3) 学校づくりで大切にしてきたこと

私は、二つのことを学校経営の戦略に掲げてきた。一つは「創意ある教育活動」、もう一つは「子育ては共に」である。

ア 創意ある教育活動

「創意ある教育活動」とは、教育活動を全て新しく作り出すということではなく、「今まであった内容をもう一度見直す。そして提案する」ということである。「本当に子供たちのためになるのだろうか」という視点で再考するという意味で、私の学校経営の戦略の一つとして掲げたものである。具体的には、授業づくりである。「学習指導案をしっかりと作れる教員になろう」これが、私と

教員との合言葉であった。

防災教育については、かねてから、宮城県沖地震が、近い将来99%起こると言われていたため、私は、避難訓練をしっかりと行い、日頃から備えておくことが重要であると考えていた。もともと、非常事態においては、訓練以上の行動を取ることはできないと思っていたのだが、実際にあのような天災を経験してみて、改めて、普段の訓練を徹底的にやること、訓練を真剣に行うことが大切であると実感した。校長として赴任した際、安全主任にまず指示したことは、「子供の命を守る」という視点から、避難訓練等の計画を見直すこと、そして、子供たちが真剣に取り組むように、避難訓練の内容を改善することであった。具体的には、実践的な避難訓練にすること、また、新たに引き渡し訓練の計画を立てることであった。さらに、日常の生活指導が全ての基盤であることから、これを重視した教育活動を展開することも指示した。

イ 子育ては共に

子供は、保護者と教員が一緒になって育てるものである。私は、常々、保護者には、こうした意識をもってほしいと思っていた。そこで、保護者懇談会を魅力的なものにするために、年間のテーマを設定したり、学習参観の授業を工夫したりするようにした。また、学習参観の折には、我が子の座席の隣に座ってもらうこととした。そうすれば、我が子の学習の様子や理解の程度が把握できるからである。さらに、教育講演会を開催し、学校と保護者が子供観や教育観を共有できるようにした。

さて、初めて引き渡し訓練を行った日は、とても暑い日であった。保護者からは、「なぜ、こんな暑い時にやるのか」「いつまで待たせるのか」など、たくさんの苦情があった。しかし、何を言われても「これは、命にかかわる大事なことなのです」と私は繰り返し説明した。

その後も、大雨や台風等を想定した引き渡し訓練を行い、その都度、引き渡し場所を変更してきた。それが、今回の東日本大震災の際に生きたと考える。訓練は非常に大切なことであり、学校はあるべき姿を求めて、保護者と子供に働きかける必要がある。このことは職を退いた今も強く思うことである。

(4) 大震災に遭って思うこと

大震災に遭遇して、今、私が思うことは3点ある。1点目は、防災教育の計画的な指導の重要性である。東京都教育委員会は「3. 1 1を忘れない」という補助教材を作成されたが、本教材を計画的に活用し、地震や津波発生のメカニズム、防災の基礎知識、防災の意識を高める教育を進めていただきたい。

2点目は、実践的な避難訓練の重要性である。避難訓練は、どうしても形式的になりがちである。しかし、それでは、子供の命を守ることにはつながらない。避難訓練を通して、子供たちをしっかりと指導することの大切さについて、教員に意識させることが肝要である。訓練の際の子供たちの様子、全体としての避難行動についてしっかりと確認し、検証していく必要がある。

3点目は、授業づくりを重視することである。命を守る力は、授業の中で鍛えられる。話の聞き方、廊下の歩き方、集会時の整列の仕方、それらの学習訓練をしっかりと行うことが重要ではないか。

私たち教員は、子供たちに、災禍に遭っても生き抜く力や、困難を乗り越えるための精神力を、授業や様々な教育活動の中で、一人一人にしっかりと養っていかなければならない。

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 防災について、管理職が学校の課題を把握し、その課題解決に向けて対応策を考え、訓練において実践したことが、被害を小さくしたと思う。区内の学校にも伝えたい。

【江戸川区教育委員会指導主事 守谷 暢明】

- 門脇小学校は、津波で周辺の住宅等も流され、学校自体も津波と火災で被災している。しかし、児童が無事に避難できたのは、普段から防災に対する意識をしっかりともっていたからである。いざというときに素早く行動するためには、やはり日常の訓練が大切であることを改めて感じた。

【小平市教育委員会指導主事 志村 安】

講演3 「手書きの壁新聞と、教育に期待すること」

講師 株式会社石巻日日新聞社 常務取締役 武内 宏之氏

日時：平成24年5月22日(火) 15時55分から16時40分まで
会場：宮城県立石巻高等学校 視聴覚室

※講演会場は、宮城県立石巻高等学校 校長 三国清美氏の御厚意でお借りした。



武内 宏之氏

1 講演のねらい

小学校版「3.11を忘れない」の30ページには、株式会社石巻日日新聞社の「手書きの壁新聞」を掲載し、平成23年3月12日から6日間にわたり、情報が届かず不安に暮れる人々に、必要な情報を伝えようとした同社の記者たちの奮闘ぶりを紹介している。壁新聞発行の陣頭指揮を執った同社常務取締役武内宏之氏から、発行の背景、記者として東日本大震災をどのようにとらえているか等、直接話を聞くことで、教材理解を深める機会とする。

2 講演の概要

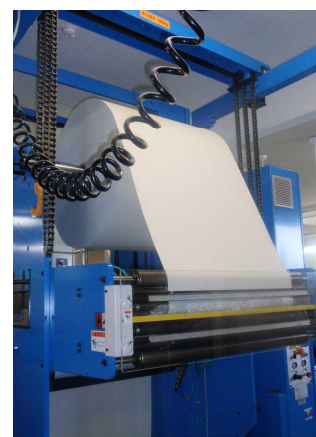
★講演の詳細記録を「指導資料(DVD)」に収録

(1) 地域の新聞社としての使命

3月11日14時46分、石巻を大きな揺れが襲った。その1時間後の15時40分頃、津波が襲来。電気や水が断絶し、パソコン、編集機が使えなくなった。同時に新聞社の心臓部である輪転機が水没してしまい、新聞を発行することができなくなってしまった。しかし、「私たちが住んでいるこの地域が、地震と津波で壊滅状態になっているのに、新聞記者として何もしないというのは、自分たちで自分たちの存在を否定することだ」という社長の言葉を受け、若い社員から「自分たちの代に、数日間新聞を出さないという歴史は作りたくない」という声が上がった。

そこで、かろうじて浸水を免れた新聞用紙のロールと社内でかき集めたフェルトペンを使って、手書きの壁新聞を震災の翌日から発行することを決定した。

手書きの壁新聞を六日間も発行し続けることができたのは、「新聞人の意地」によるところが大きい。記者らは、雪が降る中、1.5mの水に胸までつかりながら、取材を続けたのである。



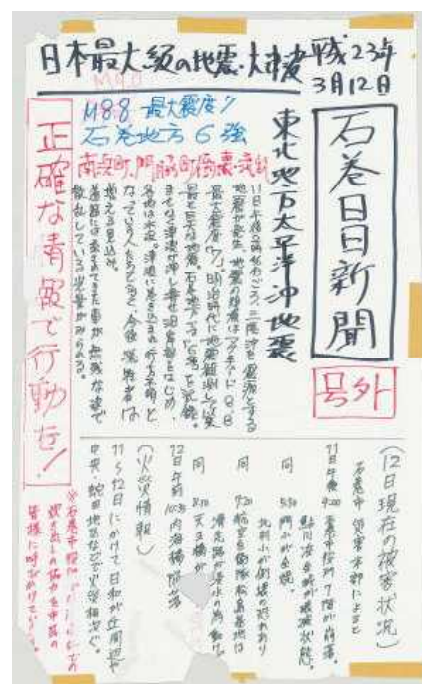
新聞用紙のロール

(2) 被災地の住民の本当の苦しみ

3月11日当日、人が津波に流されていくのを目撃している人が多くいることが分かった。中には自分の娘が流されていくのを目の当たりにした父親もいる。取材した人々からは、「生きるということをもって真剣に考えなさい」というメッセージをいただいたように思う。

石巻市をはじめ被災地の人々は、これまで築いてきた生活全部を、地震と津波で奪われてしまった。震災後の不便な生活の中で、私たちは、食べることのありがたさなど、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前でないということを実感した。この震災は、私たちに、「地に足を付けて生活しているか」ということを問うているのではないかと思う。

被災地の瓦礫は、少しずつ撤去されている。しかし、被災



手書きの壁新聞 第1号(3月12日)

した人々の心には傷が深く残っている。震災から1年が過ぎたが、自分たちの生活や命をどう捉えたらよいか悩んでいるのではないか。

(3) 子供たちの笑顔の復活が、真の復興

特に気になるのは、子供たちの心の中である。震災のことを話すと、当時のことを思い出さないようにしているのか、我慢しているのか、無表情になる子供が目立つ。

子供の笑顔や元気な声は、地域の大人たちを元気にしてくれる。震災後の厳しい状況だからこそ、もっと子供たちを支援していく必要があるのではないかと思っている。

町の復興に当たり、家や施設、堤防等が形作られても、そこに住む人たちが安定した日々が送れなければ、本当の新しい町とは言えないのではないか。今の子供たちは将来、復興の仕上げをしてくれる年代でもある。子供たちをはじめ、あの日に負った心の傷をどのようにケアし、心から笑顔があふれる町にできるのか、これが大きな課題である。

(4) リーダーの決断と判断の重要性

大震災後、誰もが今後の行動や方針に迷いをもったであろう。しかし、その時に、会社経営者等のリーダーが、復旧・復興に向けた組織的な方針を明確に示すことができたかどうか、それが1年2か月後の今に響いていると考える。

門脇小学校を取材していて、印象深いことがあった。それは、ある児童が、「校長先生が逃げると言ったから、僕たちは高台に逃げたんだ」と言ったことである。子供たち全員が高台に避難した状況を見て、大人たちは、すぐに高台に逃げないと駄目だと思ったそうだ。

この決断を下した鈴木前校長先生の素早い判断こそ、一人の犠牲者も出さずに学校にいた子供たちを避難させることができた要因である。

(5) 地域を知ることの大切さ

石巻には、多くの児童が亡くなった小学校もある。取材していて思うのは、地域を知ることの大切さである。もちろん、学校教育における防災意識の醸成も大切だが、地域を学ぶことの大切さについて改めて実感している。地域のことを知っているからこそ、いざというときに災害に対応できる。どこに逃げればいいのか、どうすればいいのか判断することができる。

門脇小学校の対応や被災した学校の話を知っていると、学校での防災教育と同時に、地域を含めた防災教育の在り方や、学校を含めた地域防災の在り方が大切なのではないか。



(6) 結び

私たちは辛い体験をした。この辛い体験を、辛い体験のままで終わらせたくない。話を聞いてもらった方に、それぞれの立場で役立ててもらいたい。自分の辛い体験が、誰かのために役立ったと感じること、それこそが、自分たち被災者にとっても救いとなるのである。

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 校長の素早い判断により、全校児童が避難し無事だったという門脇小学校の事例が心に残った。視察研修の内容と共に、自分自身が感じた防災教育の重要性、校長としての判断・行動の重さ、行政として取り組む内容等について、様々な機会を捉え、伝えていきたいと考えている。

【台東区教育委員会統括指導主事 杉渕 尚】

- 学校だけが防災教育を推進するのではなく、地域の防災意識も高めていくことが重要であると御指導いただいた。学校・家庭・地域が一体となった防災研修の重要性を再確認した。

【杉並区教育委員会指導主事 薩摩 博之】

講演4 「東日本大震災に思う」

講師 石巻市教育委員会 元教育長 阿部 和夫 氏

日時：平成24年5月22日(火) 18時15分から19時15分まで
会場：宮城県松島町 松島センチュリーホテル会議室



阿部 和夫氏

1 講演のねらい

阿部和夫氏は、平成20年11月まで、石巻市教育委員会教育長を9年8か月間務められた。石巻の教育や地理、歴史に造詣が深い阿部氏が見た、石巻地方における東日本大震災の状況、地理・歴史的背景から得た災害の教訓から、防災教育の改善の視点を得る。

2 講演の概要

★講演の詳細記録とレジュメを「指導資料(DVD)」に収録

(1) VTR視聴 ～津波はどのように押し寄せてきたのか～

岸壁から500mの地点にある石巻ガス社屋の屋上(石巻市明神町)と、海岸から100mの地点にある石巻市雄勝総合支所の屋上(石巻市雄勝町)の2箇所で見られた津波の映像を視聴した。津波のすさまじい威力が伝わってきた。

- 海から水が勢いよく押し寄せ、あっという間に水かさが増していく。
- 普通乗用車が流される。家の1階部分が水没する頃、大型トラックも流され始める。流された車は大きな建物にせき止められ、そこに次々と家や車が流されてくる。
- 家が流される。電線にぶつかった家は、糸で粘土を切るように横に切断されたり、根こそぎひっくり返されたりする。
- 街は水没し、家の屋根をわずかに残すのみとなる。
- 津波の高さは、石巻港5.8m、女川港18.4m、女川沖の笠貝島4.3m



流され始めるトラック



電線でひっくり返された家



水没した街

(2) 震災によって発生した問題

地震によって発生した津波は、石巻市の中心市街地と沿岸部に侵入したために、様々な被害を発生させた。

【直接的被害】

ア 生活基盤の破壊

○被害を受けた住宅53,742棟 ○世帯数55,900世帯 ○被害人数149,400人

イ 人的損失

○石巻市民の死者3,074人(平成24年4月末現在)
※宮城県全体の死者数(9,516人)のおよそ3分の1

ウ 生産手段の破壊と商業活動の停滞

水産業、農業、工業、林業、商業、畜産業、運輸、観光に多大の影響を及ぼした。それらの経営者のみならず、多くの従業員から職場を奪った。

エ 歴史資料、文化遺産、文化財の喪失

【大震災に付随して発生する問題】

ア 不便な住環境

7,153戸の仮設住宅に16,764人が生活している。暑さ寒さの対応が難しく、入居に際して家族が分散してしまうこともある。原則として2年という期限があるため、その後どこに住むかという問題で苦慮している。また、被災した自分の家で暮らしている世帯(推定3,000世帯)は、行政の支援から漏れ、自分の力で生活していくことの難しさを抱えている。

イ 復興を妨げる災害廃棄物や瓦礫

石巻の災害廃棄物の量は616万3,000トンで、通常年のごみの120年分に相当する。環境省は2年後を目途に処理すると言っているが厳しいと思う。広域処理の受け入れに反対する他県の市民の様子が報道されているが、被災地の人々はそれを複雑な心境で眺めている。

ウ 人口流出

石巻市から転出した人の数は住民票の移動だけでも5,459人に上る。実際はさらに多いと思われる。この人口流出は、学区の再編成問題にもつながっている。

エ 朝、夕の交通渋滞

交通面での復旧が大幅に遅れている。

オ 心のケアの問題

自分だけ生き残ったけれど、家族を助けられなかったという自責の念に耐えかねている人、瓦礫の下から助けを求める人々の声が今でも耳に焼き付いて離れない人、親友の死を受け入れられず不登校になった小学生。子供はもちろん、子供を支援すべき大人自身が心のケアを必要としている。

(3) 危機管理に際しての意識・認識

人々が行動する上での判断基準は、これまでの経験やこうあってほしい、こうありたいという自分の願望が判断根拠となっていたのではないか。自然災害を始めとした様々な危機管理において大切なことは、最悪の場合を想定して訓練すること、万が一事故が起きた場合には的確な判断と指揮系統を重視して行動することが大切である。

(4) 「歴史」に学び、「震災」を後の世に生かす

今回の震災では、あまりの揺れの大きさから、平安時代の貞観地震とその後発生した津波を連想し、すぐに家族全員を日和山に避難させた人がいる。歴史的事実を見事に生かした事例である。今回の大震災をどのように把握して、次に生かし、いかに未来につなげるか。これが生き残った者の責務であると考えている。そこで、この震災を後世に伝えるために、2本のドキュメンタリー映画を製作した。「わたしはここにいます～石巻・門脇小学校・夏」及び「3月11日を生きて～石巻・門脇小・人びと・ことば～」現在3本目を製作中である。今後、全国で公開していく。

(5) 「被災地 石巻」そして、「歴史の街 石巻」

石巻は、昔からロシアとの関係が深いところでもある。被災地という面以外においても、石巻を意識してほしい。ここでは、歴史の街、石巻としての側面を三点紹介する。

一点目は、石巻は、日本におけるロシアとの最初の交流の場であるということ。元文4年、石巻の網地島の島民が、言葉が通じないのにも関わらず、ロシアのシュパンベルグ大尉率いるミハイル号の乗組員と、船上で交流を図った。

二点目は、文化元年、ロシア使節のレザノフが、ロシアに漂着した石巻若宮丸の乗組員4名を日本に送り届けるという名目の下、日本との通商を求めて長崎を訪れたこと。この時送り届けられた石巻の漂流民4名が、実は日本人として初めて地球を一周した人たちである。

三点目は、明治13年、石巻新田町に、ハリストス正教会の教会堂が建てられたこと。ちなみに、この協会の初代の司祭は沢辺琢磨と言い、坂本竜馬の又従兄弟である。現存する日本最古の木造建築教会であるハリストス正教会の教会堂が、あの大津波に耐えて残ったということは、奇跡だと言わざるを得ない。

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 各学校の危機管理に対しての意識を高めるために、自地区での災害の歴史と想定される被害状況を資料にまとめて提示していく必要性を感じた。また心のケアに関しては、教員が児童・生徒に手を差し伸べるための手立てとともに、自治体が被災した教員のケアについても事前に体制を整備しておく必要があることが分かった。学校に対して、今後の防災教育の留意点について啓発するとともに、次年度の教育課程における各校の学校安全計画の改善に向けて指導・助言していく。

【葛飾区教育委員会指導主事 伊藤 健治】

視察2 石巻市雄勝・北上・河北地区

講師 石巻市教育委員会 元学校教育課長 阿部 邦英氏

日時：平成24年5月23日（水）8時45分から12時10分まで
場所：石巻市雄勝・北上・河北地区



阿部 邦英氏

1 視察のねらい

石巻市の太平洋沿岸、リアス式海岸地域である雄勝・北上・河北地区を視察することで、東日本大震災による沿岸部の津波被害の状況や、現在の復旧・復興の状況を視察する。

2 視察の概要

★相川小学校を撮影した動画と、各地区の写真を「指導資料(DVD)」に収録

石巻市雄勝・北上・河北地区への視察は、阿部邦英氏の案内により、A班31名が参加した。

(1) 視察先

ア 石巻市北上地区・相川小学校・津波の碑(地震があったら津波の用心)

北上地区は旧北上町である。北上川河口左岸の追波湾から南三陸町志津川との境まで海沿いに続く海岸線に点在する13の集落は「北上町十三浜」と呼ばれ、わかめ等の海産物が名産。津波の碑は同白浜海水浴場付近にある。

東日本大震災では、高さ約17mの津波が押し寄せた。



イ 石巻市雄勝地区・雄勝総合支所跡・仮設商店街「おがつ店こ屋街」(商店街の名称)

雄勝硯の産地として有名な石巻市雄勝地区は、旧雄勝町である。

東日本大震災では高さ約21mの津波が押し寄せ、雄勝総合支所や市立雄勝病院等も大きな被害を受けた。

ウ 石巻市河北地区・大川小学校

河北地区は旧河北町である。東日本大震災では、北上川河口付近で高さ約12mの津波が、北上川沿いを約13kmさかのぼった。川からあふれた津波は北上川両岸に大きな被害を与えた。大川小学校は、北上川河口から約4kmの新北上大橋のそばに位置する。

(2) 石巻市立相川小学校

石巻市立相川小学校では、以前から地震・津波が来たら、校舎東側の高台(校舎3階とほぼ同じ高さ)の神社に避難することが伝統として引き継がれ、児童・教員にも避難場所としての意識が植え付けられていた。震災2日前の3月9日の地震発生時も神社に避難したばかりだった。

3月11日、地震発生後、訓練どおり在籍していた児童と教員全員が神社に避難した。その後押し寄せた津波によって、校庭の車も学校周辺の家々も全て押し流された。

校長は想像を絶する津波の光景を目にし、「ここには危ない。この場所から離れ、山に登れ」と指示を出した。児童・教員は、急斜面の杉林を約30分かけて登りきり、山の上にある子育て支援センター(旧相川中学校)に避難することができた。



相川小学校校門と校舎



相川小学校と避難した校舎の裏山

(3) 石巻市雄勝総合支所跡

北上川沿いに走るバスの車窓からの田園風景が、河口付近では一変した。雄勝地区では、建物の土台がわずかに以前の町並みを想像させるばかりである。雄勝小学校の校庭には、瓦礫が積み上げられていた。

雄勝総合支所の庁舎には、3階付近まで津波の跡が残り、その威力に恐怖を実感した。その一方で、敷地内には復興商店街「おがつ店こ屋街」が昨年11月から営業を開始している。雄勝硯の復活を目指す「雄勝硯生産販売共同組合」も事務所を構えており、地元の人々の努力を実感した。



雄勝小学校



旧雄勝町庁舎(雄勝総合支所跡)



復興商店街「おがつ店こ屋街」

(4) 石巻市立大川小学校

北上地区から新北上大橋を渡ると河北地区釜谷である。ここは多くの児童や教員が犠牲となった大川小学校の所在地でもある。当日、大川小学校の現校長である千葉照彦様や保護者等関係者がいらしていたので、弔意を申し上げるとともに、参加者一同、持参した花束を供え、犠牲となった児童・教員の冥福を心から祈った。

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 今回の視察を実践的な防災教育に生かすために、3点のことを学んだ。
 - ① 各学校における避難訓練の見直し。危機管理の重要性について、改めて着目していく必要がある。教職員が連携し、非常時の対応の流れを見直す。
 - ② 学校・地域と連携した防災訓練。地域防災訓練の実施、地域との連絡協議会の設置などを取り入れ、日頃からの連携を図る。
 - ③ 管理職の強いリーダーシップ。危機管理体制の強化と共に、学校の責任者である校長のリーダーシップが重要であること。 【北区教育委員会指導主事 島野 歩】

- 石巻市雄勝地区を中心とした視察は、今回の津波が現地の人に物理的・精神的にいかに甚大な被害を与えたかを実感できたという点で特に印象に残った。相川小学校、大川小学校の場所に実際に立つことで、瓦礫の処理がまだまだ終わっていないこと、まだ見つからない児童の捜索が続いていること、復興に向けて、我々も一緒に考えなければならない様々な課題がたくさんあることを感じた。まずはこの現状をしっかりと伝えていきたい。 【日野市教育委員会指導主事 長崎 将幸】

- 被災した学校、地域の様子を実際に見ることで、日々の防災教育がいかに大切か、また、校長のリーダーシップ、決断力がいかに重要か、考えさせられた。また、災害から学んだものを確実に残していかなければならないと思った。 【清瀬市立清瀬第三小学校 校長 兵頭 扶美枝】

- 震災から1年以上経過しても、壊れたままの建物や瓦礫の山が点在する石巻市を視察して、改めて、被災地の現状を教員に伝え、各校の危機意識を高めることの必要性を感じた。また、津波を想定した避難訓練を実施していた小学校では、震災時の人的被害を最小限に抑えることができたことを知り、本市においても、地域の実態を踏まえた防災教育の充実・改善を図っていききたいと考えている。 【西東京市教育委員会指導主事 西川 幸延】

視察3 石巻市牡鹿地区、女川町

講師 石巻市教育委員会 元教育長 阿部 和夫氏

日時：平成24年5月23日（水）8時45分から12時10分まで
場所：石巻市牡鹿地区、女川町



谷川小学校と阿部 和夫氏

1 視察のねらい

石巻市の太平洋沿岸、リアス式海岸地域である牡鹿地区や、隣接する女川町を視察することで、東日本大震災による沿岸部の津波被害の状況や、現在の復旧・復興の状況を視察する。

2 視察の概要

★谷川小学校等を撮影した動画と、各地区の写真を「指導資料(DVD)」に収録

石巻市牡鹿地区、女川町への視察は、阿部和夫氏の案内により、B班31名が参加した。

(1) 視察先

ア 石巻市牡鹿地区^{もものうら とうせんじ}桃浦・洞仙寺

石巻市牡鹿半島の北西、石巻湾に面した海岸沿いで、港のあった地区である。津波により9割以上の家屋が流出、倒壊しており、現在、本地区にはほとんど建物が存在していない。ここでは洞仙寺を視察した。

イ 石巻市牡鹿地区谷川

石巻市牡鹿半島の北東、太平洋側に面した海岸沿いの地区で、地域は三陸のリアス式海岸となっている。

津波は20mを超えて地区ごと飲み込んでおり、本地区に残存する建物はほとんど見当たらない。谷川小学校を視察した。



谷川小学校周辺。集落全てが流された。

(2) 洞仙寺における震災時のエピソード

大地震発生後、住民は、地区の高台にある洞仙寺に避難した。しかし、住職が外出中であったため、寺の中に入らず、近くの荻浜小学校に移動することとなった。ところが、その後、津波が海辺の建物を飲み込み、最初に避難しようとした洞仙寺も柱や壁が押し流された。津波が去った後は、寺の瓦屋根が残るのみであった。もし、あのまま洞仙寺に避難していたら、全員が犠牲者となった可能性がある。結果的に住民は助かったが、ここは安心だと言われている場所でも、災害の規模や種別によっては危険な場所にもなり得ることを想定しておく必要がある。



洞仙寺 跡



復興を願って設置された「復興の鐘」



桃浦の状況

(3) 石巻市立谷川小学校

石巻市立谷川小学校は、海岸線から十数メートルのところにある。この学校は、津波によって2階建ての校舎及び体育館の全てが飲み込まれたが、人的被害はなかった。

東日本大震災発災直後、谷川小学校では既存の危機管理マニュアルに即して、児童・教員は校庭に避難した。その後、発令された大津波警報や、海面が大きく引いていることを踏まえ、小学校の前にある高台の道路へ避難した。その直後、津波の第一波が押し寄せた。体育館が流されるとともに、校舎も2階まで浸水してしまった。そこで、さらに県道を越えたところにある山に避難した。

しかし、そこは、避難場所として夜を過ごすことが適切とは言えない状況だった。その時、地域の方から、「過去の津波災害時には、小学校の裏山の神社に避難して助かった」という言い伝えのあることを聞き、校長は現時点での児童の様子や付近の状況等を総合的に判断し、小学校の裏山への移動を決断した。夕刻、周りも暗くなりかけている時間帯であった。

避難してきた経路を戻り、校庭を横切際には余震等の懸念もあったが、おびた^{がれき}だしい瓦礫を乗り越え、必死に小学校の裏山の神社に向かった。その場所で、厳しい寒さの中、地域の方とともに、不安な夜を過ごしたのだという。

谷川小学校の事例からは、学校の立地する地域を熟知しておくこと、そして、現地に残る言い伝えや地域住民の声など、多岐にわたる情報を日頃から収集しておくことが、災害時の避難の際の適切な判断材料となったことが分かる。



谷川小学校全景



校庭から高台への避難ルートを視察



避難した裏山

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 谷川小学校を視察し、地域との連携を図った防災教育を推進するために、地域の人たちの知恵や進言が、校長のリーダーシップや混乱の中での決断を支えたことを、各学校に伝えていく。地域と共にあることで、学校が危機から救われたという事実は、各学校における地域との連携の在り方を振り返り、見直すきっかけを与えると考える。

【東京都多摩教育事務所指導課指導主事 浅野 あい子】

- あまりにも甚大な被害に言葉を失った。地域が全て流されている状況の中、校長先生が収集した情報の中から、必要かつ重要なものをより分け、的確に判断し、明確な指示を出したことで、子供たちの命が救われたことに感銘を受けた。

【武蔵野市教育委員会指導主事 谷合 みやこ】

- 谷川地区の視察で、一層、津波の威力の大きさを感じた。ここを实地踏査して参考になったことは、防災計画に従って、マニュアルどおりに避難したこと、校舎の建つ土地やその周辺の土地の特徴を十分に把握し、災害が発生したときの判断に生かすこと、地域住民の話や土地に残る言い伝え等、多岐にわたる情報を日頃から収集し、災害時の対応における判断材料にする必要があることが分かった。また、「判断する」ということは、多くの情報の中から、適切な方法を選択するというを改めて実感した。

【青梅市教育委員会指導主事 手塚 成隆】

- 地域の方の助言を基に、小学校裏山に最終避難するという校長先生の判断により、一人も被害者を出さなかった。校長の決断力の大切さを学んだ。

【狛江市教育委員会指導主事 楨田 稔】

講演5 「東日本大震災での体験及び震災対応」

震災を乗り越え、夢や希望をもって生きようとする児童の育成に取り組んだ事例(みやぎの志教育)

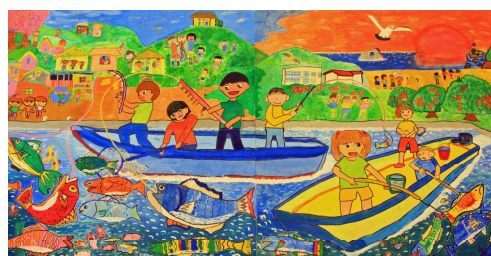
講師 東松島市立宮戸小学校 校長 日下 嘉充氏
同教頭 鍵 頼信氏 同教諭 宮崎 敏明氏
宮戸小学校仮設住宅自治会 会長・大浜区長 佐藤 康男氏

日時：平成24年5月23日(水) 13時05分から15時45分まで
会場：東松島市立宮戸小学校 体育館

1 講演のねらい

小学校版防災教育補助教材「3. 11を忘れない」には、東松島市立宮戸島の児童29人が、被災後に作成した壁画「10年後の宮戸島」が掲載されている。宮戸小学校は、宮戸島にある唯一の小学校であり、被災後、避難場所となっていた学校である。壁画を作る活動にいち早く取り組んだ背景や震災当日から復旧までの経緯、現在の状況について知る。

また、宮戸小学校の校庭に設置されている仮設住宅自治会長から、被災から現在までの状況や、宮戸小学校と地域の連携等について学ぶ。



児童が作成した壁画「10年後の宮戸島」

2 講演の概要

★講演記録の詳細とプレゼンテーション、写真を「指導資料(DVD)」に収録

(1) 校長 日下 嘉充氏 挨拶

本校は明治6年に開校し今年で139年目。全校児童28名。東日本大震災では、高台にある本校へ島民の約9割が避難。昨年7月、校庭に仮設住宅ができるまで、体育館は、避難所として用いられていた。避難所や半壊の住宅で暮らすという環境の中で、子供たちのストレスは増していった。そこで子供たちに夢と希望をもって生活させたいと考え、「将来の宮戸島」を絵で表現する「宮戸島復興プロジェクトC(チルドレン)」の活動を開始した。壁画「10年後の宮戸島」はその取組の成果である。一連の活動によって、子供たちは自己有用感や大人への信頼度の増加、向上心等をもつことができた。傷付いた子供の心を何とかしたいという教員の強い願いと、それに向かう子供たちの素直さ、そして地域の皆さんの支援が一つの活動になって実を結んだと思っている。



日下 嘉充氏

(2) 教頭 鍵 頼信氏による講演 「宮戸小学校の震災対応について」

ア 平成23年3月11日

強い揺れの後、児童を校庭へ一次避難させる。保護者から津波の情報を得て、児童の引き渡しを行わないことを決定した。その後、約900人の島民が避難してきたため、児童とともに体育館に収容した。

15時45分頃、防災電話が不通となった。15時55分頃、学校の下まで津波が押し寄せる。児童は全員無事であった。本校は昔から地域との結び付きが強いので、非常時にあってもスムーズな連携が図られた。



鍵 頼信氏の講演

イ 避難所の様子と、地域との連携

3月12日の朝、やっと防災無線が通じた。市の対策本部とは連絡が取れるようになったが、ヘリコプターが到着したのは翌13日の朝、7時40分であった。今回の被災を通して、日常的に地

域と交流して情報交換をしていくことの大切さを改めて確認した。また、学校が避難所となったことで、避難所で暮らす方々に入学式に参列していただいたり、仮設住宅の方々に、学校の避難訓練に参加していただいたりするようになった。

ウ 宮戸島復興プロジェクトC (みやぎの志教育)

宮戸島復興プロジェクトCの三つの方針は、「明日の宮戸に向けて夢を持つてのびのびと表現する」「子供一人一人の思いを大切に作る」「家族や地域の人に自分の夢と思いが伝わるようなものにする」ということである。

この宮戸島復興プロジェクトCの活動の一環である、壁画「10年後の宮戸島」作成の目的は、まず、子供たちの心のケアにあった。もう一つは子供たちの中で、「先生、物資？」という言葉が流行ったことである。支援物資の「物資」である。いつの間にか子供はもらえることを当たり前のように感じていたので、これは危険だと考えた。我々はいつまでも被災者ではない。自分たちの力で進んでいかなければならないという思いがあった。さらに、教員からも、宮城で進めている志教育の一つとして、子供たちが夢と希望をもって学校生活を送るために10年後の宮戸島を図工で表現させたいという声が上がった。

(3) 担当教諭 宮崎 敏明氏による講演 「宮戸島復興プロジェクトCについて」

震災後、子供たちの心に変化が見られた。些細なことでけんかをしたり、上級生が下級生の足を踏んだりするなど、従来は見られなかった行動が散見するようになった。そうした中、教員の中から、子供の心のケアを行わなければならないという声が上がった。そこで始めたのが宮戸島復興プロジェクトCである。図工科では、子供たちに、宮戸島の自然や楽しかった思い出を振り返らせ、それを絵に描かせる活動を行った。そして、その絵を題材にして、今後、どのような宮戸島になってほしいか、子供たちそれぞれの思いを書かせた。

この作品を島内の施設「縄文村」に貼り出したところ、地域の方々がとても喜んでくださった。そこで、これらの絵をベニヤ板4枚分の壁画「10年後の宮戸島」にまとめる活動を行った。

現在、復興に向けた実践的な活動として、津波で流失したハマボウフウ(浜防風)やハマヒルガオ(浜昼顔)の苗を育て、海岸へ移植する活動を行っている。



宮崎 敏明氏

(4) 宮戸小学校仮設住宅自治会長・大浜区長 佐藤 康男氏による講演

東日本大震災当日、地震があった直後、直感的に津波が来ると感じた。津波が到達する16時頃まで時間があったので、準備を行った。「防災」や「教育」に王道はない。こうすれば助かるとか、こうやれば大丈夫ということはない。最後は、個人個人の自覚と、まず行政が示したマニュアルどおりに動けるかということ。日常の心の繋がりが災害には一番強い。今回の震災は、東北、宮城だけではなく、

震災対応については、外国からも高い評価を得て、世界にも日本の良さを伝えられたのではないかと考えている。後ろを振り向かず、他と比べずに、日頃の地域の輪を広げること。素直に人の話を聞くこと。それが基本だと思っている。



佐藤 康男氏



宮戸小学校校庭の仮設住宅

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 宮戸小学校の先生方は、自らも被災者でありながら、「震災を乗り越え、夢や希望をもって生きようとする児童の育成」を掲げて取り組まれた。子供たちは壁画「10年後の宮戸島」を共同制作する中で、未来に希望の灯をともし、心の安定を取り戻していった。本校の取組は、震災という非常事態を経て、改めて教育の可能性と教育に求められる本質を問い直すきっかけとなった。私は市内各学校に宮戸小学校の力強い活動を伝え、防災教育はもとより教員や学校の役割について考え直すきっかけを作っていく。 【町田市教育委員会指導主事 長田 猛】
- 避難場所となった宮戸小学校には多くの島民を収容した。現在でも校庭には仮設住宅があり、通常の教育活動を行う上では、不自由な面がある。しかし、授業再開のための校舎明け渡しに当たり、全住民が学校の清掃活動を行い、使用前よりもきれいにしてくれたという話は、地域住民の宮戸小学校に対する愛着・誇りの表れと感じた。日頃の学校と地域の連携の大切さを改めて認識させられた。 【稲城市立稲城第一中学校 校長 高木 行雄】

講演6 「震災時の対応、避難所運営、震災後の対応について」

講師 東松島市立大曲小学校 校長 亀卦川 孝雄氏

同教諭 門脇 雅孝氏

同校児童の祖父・東松島市自主防災連絡協議会幹事 菊池 和夫氏

東松島市スクールカウンセラー(岐阜県教育委員会から派遣) 早川 千恵子氏

日時：平成24年5月23日(水) 13時00分から15時40分まで

会場：東松島市立大曲小学校 理科室・講堂

1 講演のねらい

小学校版防災教育補助教材「3. 11を忘れない」には、東日本大震災当時、大曲小学校4年生だった杉浦遙さんの作文「あの日」を掲載している。そこには、津波で流されてきた人を助ける祖父の活躍や、江東区立枝川小学校との交流が記されている。大曲小学校を訪問することで、当時の大曲小学校の被災状況等とともに、震災の直後の同校の対応、教員の役割、学校の再開に向けた実践的な活動について、講演を通して実感をもって知ること。

2 講演の概要

★講演記録の詳細とプレゼンテーション、写真を「指導資料(DVD)」に収録

(1) 校長 亀卦川 孝雄氏 挨拶

生き残った私たちに何ができるのか。やはり今回の悲惨な体験を、そこから得た教訓と課題を、今後に活かしていく。そしてこの出来事を風化させないことが重要である。



亀卦川 孝雄氏

(2) 教諭 門脇 雅孝氏による講演

「大曲小学校の東日本大震災の様子、被害、対応について」

ア 地震時の状況

震災発生後、児童・教職員が校庭に避難、続いて、指定避難場所である講堂に移動した。来校していた業者のワンセグ情報から大津波警報を得て、急いで避難場所を校舎内に変更、2階へは地域住民、3階へは児童を避難させた。その後、津波は瓦礫とともに黒い水となって海から3kmも離れた本校まで襲来。校舎の1階が浸水した。本校は、間一髪で助かった地域住民を含む約600名とともに孤立した。防災マニュアルにない事態が次々と降りかかる中、「皆を守ろう」という言葉の下、教員たちの奮闘が始まった。毛布代わりにしたのは教室のカーテン。子供たちは、皆でカーテンに包まり身を寄せ合った。子供たちの上履き入れは即席の靴にし、避難して来た人々に履いてもらった。しかし、学校の中に水や食料の備蓄はなく、外からの支援物資が届いたのは3日目以降のことだった。



門脇 雅孝氏による講演風景

イ 避難所対応

初期対応は教員のみで行ったが、食糧確保と防寒対策に追われた。各教員は、児童対応をする者と避難者の対応をする者の二手に分かれ、役割を分担して避難所運営に当たった。2日目以降は、避難者の人員の確認、3日目以降は緊急支援物資の配給等を実施、4日目以降は自衛隊や消防団の方の力を借り、放水をしながらの清掃作業を実施した。学校の再開期限が区切られたため、避難所を段階的に地域の組織等に移行していくことができた。

ウ 学校再開に向けて

まず学校の再開に向け、教員が1階の清掃を行った。次に、児童のPTSDへの対応として、研修会を実施し、教員が「話す(話を聞く)、放す(少し手放してやらせてみる)、離す(少し距離を

置いて見る)」というキーワードを基に、子供たちに接していくことの大切さについて学んだ。

さらに、様々な支援・応援をしてくれた人に対して、「笑顔の地産地消」（学校から笑顔を発信し、地域に広げる）をスローガンとした教育活動に取り組んだ。

エ 改善策

震災以後、防災マニュアルの改訂を行い、津波を想定した避難訓練を繰り返し実施している。また、校舎の屋上近くに防災用品の備蓄位置を変更するなどの工夫を行った。もう一つの大きな変更点は、保護者への引き渡し方法で、津波警報が出ている間は、保護者にも校舎内に待機してもらうこととした。

(3) 大曲小学校児童の祖父 菊池 和夫氏による講演

ア 防災に対する考え方

「死んでもだめ、死なせてもだめ」犠牲になられた方々への^{ざんき}慚愧に堪えない思い。津波ハザードマップを基に、避難場所の備えはしていたが、想定を越える津波に対する準備はできていなかった。大曲の地形は平な田園地域で高い建物は少ない。想定外の想定も必要なのだと痛感した。また、学校を避難所とした場合の整備の在り方についても、検討・見直しが必要である。混乱の中、優先すべき事項を見極め、行政、地域、学校と連携し、情報の共有化を図っていくことが望まれる。



菊池 和夫氏

イ 3.11東日本大震災体験記録—^{うべな} 諾いがたき記憶として—一兄姉・姪甥そして娘夫婦と孫に伝える

未曾有の大地震、引き起こされた津波、破壊された家々…人々が長年かけて築き上げた全てが流され、壊され、人まで飲み込んで迫り来る。この事実は^{えんか}嘆下し難いが、被災者として、被災児童の祖父として、自主防災会の一員として、体験したことや感じたことを伝えていきたい。

(4) スクールカウンセラー 早川 千恵子氏 講演

震災から一年が経過した今、学校での子供たちの様子を見てみると、大変な状況を経験したとは思えないほど落ち着いて見える。しかし、これは、実は子供たちが我慢をしているからではないかと考える。また一方で、先生方が見守ってくれているという安心感があるからではないかとも思う。改めて災害時の学校の機能の重要性というものを感じている。

スクールカウンセラーとしては、子供の「声にならない声」を感じ取っていく必要があると思っている。一人一人の子供が抱えている心のダメージは、自我の強さや、家庭の状況等により異なってくる。だからこそ、個別の配慮が必要である。また、家庭環境の安定を図ることが子供の心の安定を図ることになるので、これからも先生方と協力して子供たちを守っていきたい。



早川 千恵子氏

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 児童・生徒に対する「自助」の力を身に付けさせる取組を推進するため、教員対象の防災教育研修会を実施する。その際、児童・生徒名簿の必要性や、想定場面や地域と連携した避難訓練の工夫・改善、防災行政機関や消防署等と連携した訓練計画の見直しや災害備蓄品に関する研修内容の設定等、指導主事として課題意識をもって取組む。

【立川市教育委員会指導主事 堀田 智暁】

- 避難時や避難所の対応で、想定外の事態に遭遇し、判断を求められる場面が多くあったことを聞いた。本校の対応を教訓として考えると、常日頃から様々な状況を想定した安全・防災対策について考え抜くこと、そして、そのための備えを万全にするための努力を続けていくことを強く確信した。各校に防災担当者を位置付け、防災教育・防災対策を充実させていくことを提案していく。

【小金井市教育委員会指導主事 高橋 良友】

- 門脇教諭の御講演から、子供たちの教育環境を守ること、避難場所として機能させること等、学校として困難な状況を適切に乗り切ったチームワークのよさを感じた。菊池氏の御講演には、3.11当日の大変な状況が目に見え、被災された皆様の苦難に胸がしめつけられる思いがした。各学校の防災教育の改善・推進に向け、この視察で得た思いを大切に取組んでいく。

【羽村市教育委員会指導主事 三品 孝之】

講演7 「3. 11震災時の消防活動について」

講師 いわき市消防本部常磐消防署 署長 黒澤 正明氏



黒澤 正明氏

日時：平成24年5月24日(木) 9時00分から9時50分まで
会場：いわき市消防本部常磐消防署 会議室

1 講演のねらい

地震・津波・火災・原発事故と、次々に襲いかかる災害を前に、現場の最前線で陣頭指揮を執った、黒澤正明氏（発災当時、いわき市平消防署四倉分署長）の話を行うことで、救出・救助活動の状況や「公助」としての消防の役割について学び、地元の消防署と学校との連携の重要性について再認識する。

2 講演の概要

★講演記録の詳細とプレゼンテーションを「指導資料(DVD)」に収録

(1) はじめに

いわき市は、昭和41年10月に、「和を以て貴しと成す（以和貴）」の精神の下、14市町村の大合併により誕生した。当時の宣伝文句は、「市の面積が日本一」であった。いわき市は、約60kmに及ぶ海岸線を有し、夏は海水浴で賑わうとともに、年間を通して海の恵みが豊かであり、水産加工業が盛んな地域である。

現在、市内には消防署が5署あり、消防職員355名が配置されている。また、消防団は、第1支団から第7支団まであり、約3,800名の団員で災害対応を図っている。

いわき市災害対策本部の情報によると、平成24年5月15日現在、東日本大震災による死者・行方不明者は合わせて347名、建物全壊が7,829棟、大規模半壊が7,155棟である。



常磐消防署

(2) 東日本大震災発生

14時46分、約300m先は太平洋という場所に立地する四倉分署で勤務していたところ、突然、大きな地震に襲われた。あまりにも揺れがひどいので、昭和53年に起きた宮城県沖地震の情景がフラッシュバックした。ようやく地震が収まった時には、机の引き出しや書類等が床に散乱していた。テレビを付けると津波警報が発令されていた。

私は直ぐに広報車両に乗り、地域住民に対して「高台や安全な場所への避難」を呼びかけた。しかし、住民の中には暫く海面を見つめている人もいた。サイレンを鳴らし、拡声器で避難を呼びかけながら、私は町から町へと車両を走らせた。

(3) 久之浜地域での消防活動

国道を北に向かい久之浜の漁港に到着したときには、船舶関係者は既に沖に向かって避難した後であった。その時、突然、海面が岸壁まで盛り上がり、道路が冠水したため、逃げ道を失ってしまった。私は一瞬死を予感したが、急いで車を高台の国道まで走らせ、その場を脱することができた。その後は、消防団と協力し、溺れかけている人や高齢者等の救出活動を行った。

一方、久之浜の街では火災が発生していた。消防隊は、瓦礫等の堆積物を排除しながらやっとの思いで火災現場に到着し、ポンプ車を消火栓に付け、放水を始めた。しかし、水圧が低いのでなかなか有効な放水が得られない。消防団の協力を得ながら消火活動をしていたが、建物や瓦礫の延焼が拡大していたため、町全体が消失してしまうのではないかと恐怖心に駆られた。

最低限の消防力しか確保できない中、私は、延焼を食い止めるための防御線をどこに設定すべきか悩んだ。そして、最終的に、約4m幅の道路で防御することを決断した。

消火活動を続けていた23時頃、突如、消防本部から「10mの津波が来る」との連絡が入った。そこで、私は、消防隊に避難するよう命じるとともに、避難ルートの確認のため、高台にあ

る久之浜中学校に向かった。中学校に続く道路は避難した車両の列で数珠繋ぎの状態であった。

避難場所となっていた久之浜中学校では、婦人消防クラブと婦人会の皆さんが炊き出しを行っていた。おにぎりをいただき消防隊に配ったのち、消火活動を再開した。深夜2時頃だった。

(4) 鎮火、そして原発事故対応へ

消火活動の再開後、私は、水利不足を補うため大型水槽車の出動を要請した。その後、平消防署や勿来消防署からのタンク車等の応援もあり、消火の目途が立ってきたのは、火災発生から約15時間後のことであった。

「建物約50棟焼失、7時に鎮火」・・・本部に活動報告を入れた時、何だかほっとしたことを覚えている。災害に関する情報が錯綜する中、救出活動、病院搬送、水利状況、後続隊への指示等、私は、指揮者としてできる限りの活動を行った。

その後の活動であるが、3月12日は行方不明者の捜索（救出）活動や残火処理活動に奔走した。13日には、新たに福島第一原子力発電所事故の対応が入った。18日には、原子力発電所の冷却に当たるため、東京消防庁のハイパーレスキュー隊が到着し、四倉分署の事務室で活動のシミュレーションを行った。四倉分署も津波被害を受け、被災翌日から4月17日までは、四倉支所に分署機能を移転し、救助活動を継続実施した。四倉分署に戻った後、4月26日まで捜索活動を継続したが、これは、私にとって本当に辛い体験となった。

(5) 大規模火災の要因

大規模火災の要因としては、以下の点が考えられる。

- ア 津波に起因する災害が市内広域に発生し、消防力が分散され早期の応援隊の投入が困難であったこと
- イ 津波で発生した倒壊家屋の瓦礫が道路に大量に堆積して消防車の進入が困難であったこと
- ウ 消火栓や防火水槽が瓦礫に埋もれ、400m離れた河川からの取水となったこと
- エ 多くの人々が逃げ遅れたという情報があり、消防団とともに救出・救助活動を優先させたこと
- オ 消火作業中に約10mの津波が発生するとの情報が入り、消火活動を一時中止している間に延焼が継続したこと

(6) 今後の課題

今回の震災を踏まえ、これからの防災に求められる点について触れておきたい。

- ア 公園や公共施設への防火水槽の設置
- イ 大型水槽車の早期投入
- ウ 消防機関による海浜・沿岸部における避難広報の見直し



(7) 今、災害について考えること

地震が発生し、津波注意報・警報が発令されたら「すぐに高台に避難すること」、このことが身の安全を守るために最も大切なことである。また、様々な災害への対応について、シミュレーションし、災害を知ること、そして災害について学ぶことが大事である。私は、これからも地域の安心・安全のため、また、防災力の向上のために、消防として頑張っていく所存である。

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 震災発生後、何よりも人命最優先のもと救出活動、消火活動にあたった話が印象に残った。本区の湾岸部では津波発生懸念や高層ビル群の火災の発生等が危惧される。そこで、中学生を地域防災上の重要な担い手として捉え、平成23年度より区内全中学校（10校）の教育課程に「地域との連携に基づく防災訓練」の実施を位置付けている。今後も地域と連携を深めながら、防災教育・防災活動への取組を一層充実できるように対応していく。

【港区教育委員会統括指導主事 白石 亨】

講演8 「避難所としての学校の役割」

講師 いわき市立湯本第二中学校 校長 澤井 史郎氏
同 教頭 松本 仁志氏



湯本第二中学校

日時：平成24年5月24日(木) 10時05分から11時50分まで
会場：福島県いわき市立湯本第二中学校 体育館

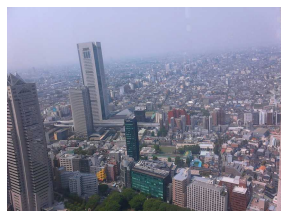
1 講演のねらい

東日本大震災後、74日間もの間、学校管理職として実際に避難所の運営に尽力した、いわき市立湯本第二中学校校長 澤井史郎氏と、同教頭 松本仁志氏に話を聞くことで、避難所としての学校の在り方、避難所運営における地域住民と学校の連携等について知る。

2 講演の概要

★講演記録の詳細とプレゼンテーション、写真を「指導資料(DVD)」に収録

(1) はじめに ～どこにも負けない避難所をつくる 校長 澤井 史郎氏



この写真は、先日、修学旅行の引率で東京を訪問した際、都庁から撮ったものである。都庁から東京の街並みを見て、「この大都市で震災が起きたらどうなるのだろうか。」と考えた。都民が入れる避難所はどこなのだろうか、備蓄品は本当に役に立つのか、どのようにして避難所を設営するのだろうか等、様々な思いがよぎった。

私たちの避難所の定義は、「自立するための鋭気と体力を養う所」。避難所運営に当たっては、「集団の組織とルールを作る」「避難者の文化を絶対に壊さない」及び「コミュニケーションの場を設定する」の3点を重視し、どこにも負けない避難所づくりを目指した。

(2) 講演「避難所の運営について」 教頭 松本 仁志氏

ア 3月11日の状況

震災後、まず何よりも心配したことは、生徒と保護者、職員の家族の安否であった。そこで、職員を、自宅が学校の近くにある者と、遠くにある者の二つのグループに分けた。学校の近くに住む職員には、自宅に戻り、家や家族の様子を見て来るように指示した。一方、自宅が遠くにある職員には、学校に残るよう指示し、使用可能な固定電話で生徒の安否確認をさせた。しかし、家族全員で避難してなかなか連絡が取れない家庭が多かったので、職員を子供たちの居住区に派遣することとした。そのうち、自宅から戻ってきた職員の報告から、周囲の被害状況が分かってきた。そこで、遠方の職員を交代で帰すこととし、渋滞等を考慮して、当日学校に戻らなくてもよいという指示を出した。



松本 仁志氏

21時頃、市の要請で避難所を開設することになり、10名程度の人が体育館に宿泊した。

イ 2日後、避難者が約300人に

震災2日後の13日早朝、いわき市久之浜地区の人たちが、バス12台で湯本第二中学校に避難してくるという連絡が入り、学校近隣地域以外の人々が避難所に大勢加わるという事態に直面した。

避難者の中には、身内が亡くなったり、家が壊れたりした人もいるだろうと考え、職員に対し、その心情を配慮して丁寧に対応するよう指示した。

ウ 学級経営の手法を生かした避難所の運営

○情報の周知やルールの徹底：集団生活に不可欠な情報やルールについて、プリント等で周知し、秩序を保つ（節水の呼びかけ、トイレの使い方、ゴミの分別、譲り合いの精神等）。

○避難者の立場で考える：校長は、避難者と共に体育館で宿泊した。夜間、体育館は非常に冷えるため、数日後から、居住場所を体育館から教室に移した。また、寝たきりの方やお年寄り、

車いすの方を優先にして、部屋割りを考える等の配慮をした。

○避難者の健康管理：保健体育科の教員の指導の下、ラジオ体操を行った。

○自治組織づくり：校長・教頭が、避難所全体の指揮を執ったが、自治会を設置し、自治会長を中心に、避難者が少しでも快適に過ごすための方策について検討していただいた。

○役割分担：自治会長は、避難者と校長・教頭との調整を図った。名簿作成係、水係、食事係、ごみ分別係、トイレ掃除係、暖房係、新聞係、校舎目張り係等、避難者のアイディアを生かしながら様々な係を作る。幼稚園から小学生の子供たちもそれぞれ役割をもち、お年寄りの相手をする等で、避難所運営に貢献した。



ラジオ体操

(3) 講演「避難所の問題点と今年度の学校作り」 校長 澤井 史郎氏

ア 避難所の問題点

○避難所名簿の作成と公開：名簿は安否確認のために絶対必要である。しかし、作成するには非常に時間がかかる。全避難所で、同一の方法や形式で作成することができるよう、手立てを考えておく必要がある。

○情報の伝達：携帯電話の不通で、生徒の安否確認は困難を極めた。情報の少なさは避難者の不安を生む。原子力発電所の事故等のニュースは、人から人へと伝わるにつれて情報が独り歩きし、パニックを引き起した。

○避難者の統制：リーダーがいないと、統制がとれず避難所は機能しなくなる。

○衛生管理：感染症等に備え、トイレや廊下に次亜塩素酸ソーダを散布したり、手の消毒をするための消毒液を用意したりした。

○健康管理：バランスのよい食事が大切である。塩分や脂質を取りすぎないような炊き出しメニューを心掛ける。

○防災無線の活用：防災無線は持ち歩きができる。日頃から、使い方をよく知っておくこと、電池切れがないか等チェックしておくことが必要である。

○薬パニック：遠隔地からの避難者の処方箋が分からず、薬局は薬を出せなかった。また、薬剤師の数が少ないため、一日に作成できる処方箋数は限られていた。

○災害時要援護者の受入れ：特別な支援を必要とする方が、他の避難所で入所を断られたケースがあった。本校では、全ての方を受け入れた。

○警備：避難所荒らし、支援物資の盗難があった。避難所では、警備まで手が回りにくい。

イ 今年度の学校作り ～与えられる者から創り出す者へ

被災地の子供たちを力強く成長させていくために、「与えられる者から創り出す者へ」というスローガンを掲げ、実践していく。そのために、地域や社会に貢献できる学校を作っていこうと考えている。そこで、大切にしたいことは二つ。一つは地域の命を守る学校であること。もう一つは生徒会主催の復興ボランティア活動を推し進め、街作りに積極的に参加させること。

ウ 学校・地域を救える管理職であるために

管理職は、いつどこで、何が起こるか分からないことを常に意識しなければならない。マニュアルは万能ではない。いざという時、臨機応変に判断することが求められる。そのためには情報の収集や連絡手段の確保が不可欠である。どのような状況下でも、職員や地域住民に的確な情報を与えられるだけの機材（無線LANでつながるパソコン、通信形式が異なる携帯電話2台、10時間分のパソコンバッテリー等）を常に携帯しておくことが必要だと考え、実践している。



澤井 史郎氏

3 今後の防災教育の改善等に向けて

○ 避難所の開設に当たって、次の3点が重要であることを学んだ。

①その状況に応じた一番良い方法を見付け、判断し、行動すること。②日頃から地域の方との連携を大切にすること。③教員や地域住民に対して十分な配慮をすること。今回の視察研修で学んだことを定例校長会・同副校長会等で伝達する。また、「防災マニュアル」の改訂や、学校の避難所運営について、防災安全課と連携するなど、市の防災にも関わり、防災教育を推進していきたい。

【東大和市教育委員会統括指導主事 岡田 博史】

講演9 「東日本大震災 被災体験から ～学校管理者として～」

講師 いわき市立四倉中学校 前校長 木村 秀子氏

日時：平成24年5月24日(木) 10時00分から10時40分まで
会場：いわき市消防本部常磐消防署 会議室



木村 秀子氏

1 講演のねらい

緊急事態に遭遇したとき、管理職としてどのように判断し、行動すべきか。東日本大震災発生の様子、その後の1年間にわたる対応等、学校管理職としての体験や心構え、信念等を聞く。

2 講演の概要

★講演の詳細記録とレジュメ、講演資料、写真を「指導資料(DVD)」に収録

(1) 3.11当日のこと

3月11日は卒業式であった。式が終わり、そろそろ着替えようかなと思っていた矢先、突然、ぐらぐらっという強い揺れがきた。私は式服のまま、校長室から校庭に飛び出した。余りにも揺れがひどいので、松の木にしがみつきながら、2階の職員室にいる教員に「早く降りて来なさい。校庭に逃げなさい」と叫んだ。

もし、卒業式の最中に、地震が発生していたら、私はどのような指示を出したであろうか。わずか数時間前まで、卒業生370人、保護者、来賓も含めると約500人が参列する中で、卒業式が行われていたことを思うと、今考えてみてもぞっとする。

さて、地震発生後、10分くらい経ただろうか。呆然としたまま、校庭の液状化現象を見つめていると、誰かが、「校長先生、うちの学校は、津波の避難場所ではないですよ」と尋ねてきたので、はっと我に返った。

テレビからは、7mの津波が到達するという津波警報が流れていた。もし、7mの津波が発生したら、校舎の2階まで完全に浸かってしまうであろう。私は、教員に「すぐに四倉高校に逃げて」と指示した。

地震発生から約15分。教員たちは30台ほどの自動車を連れ、四倉高校に向け出発した。「私も避難しなくては」と考えていると、今度は、地域の方々が、ばらばらと学校の体育館に集まってきた。そこで、私は、「ここは避難所ではないんです。避難所は四倉高校ですよ」と説明して、集まってきた住民を教員の車に同乗させ、四倉高校へと誘導することにした。

こうしているうちに、ゴーっという海鳴りの音が聞こえてきた。私が「教頭先生、逃げますよ」と言うと、教頭は、「また住民が来るかもしれない、私は残ります」と言う。「では、いざというときには3階へ。もっとひどい津波が来たときには、屋上に逃げて」私は、教頭に言い残して、自分の車で四倉高校に向かった。

その途端、バリバリという音。北に向かって進むと信号機は赤だった。何気なく横を見ると、波がわーっと押し寄せて来ていた。私はすぐにUターンし、猛スピードでいわき駅の方に向った。途中の橋で波に飲み込まれるのではないかと思ったが、何とか逃げ切ることができた。人間の命というものは、数秒で生死が決まるのだなと感じた瞬間だった。幸いなことに、教頭も教員も皆無事だった。

しかし、この震災で、電気や上下水道等、四倉中学校のライフラインの全てが絶たれてしまった。校庭には、おびただしい瓦礫があふれ、体育館、柔剣道室も損壊した。さらに3月13日、14日には福島第一原子力発電所の事故も発生し、豊間中学校と同様、我が校は、地震、津波、原発事故という三つの災害を被ることとなった。



液状化で地中から表れた浄化槽

(2) 原発事故後のこと～生徒が一人でもいる限り～

「一人でも生徒がいる限り、学校の長として逃げることはできない」メルトダウンが起こったとき、私はこう思った。

まず、学校の機能を早く回復するために、職員室を別の学校に移すことが必要だと考えた。そこで、3月18日から平第三中学校に間借りし、四倉中学校の職員室を移動して、職務にあたることとした。

在校生350名のうち約300名は管外にいたので、当初は連絡が取れない状況であった。その後、メール連絡網を作成し、保護者への連絡は、全てメールで行うこととした。

4月6日、市の文化センターで入学式が行われた。何人の子供たちが集まるか心配していたが、学校の機能が不全となっているのにもかかわらず、350名ほとんどの生徒が参列してくれたので、心から感激を覚えた。



(3) 危機管理意識の高揚とシミュレーション

校長は、子供、職員、保護者、地域住民の命を守ると共に、公的私的財産の被害を最小限に留めるという役割を担っている。校長として大事なことは、まず日頃から危機管理について考え、それに係る情報をたくさんインプットしておくこと、危機発生時のシミュレーションをしておくこと、多くの情報の中から、必要な情報を選択する力をもつことである。特に災害時においては、短時間のうちに、的確な判断と明確な指示を出す力が求められる。

(4) 校内組織体制の強化と、共通理解・共通実践

校長の思いや考えを的確に伝え、教員との共通理解を図り、校内組織を強化するために、「東日本大震災対応について(1)(2)」を発行した。これを通して、教員一人一人が、今、自分がすべきことについて考え、意識して行動することができたと考える。

(5) できることは自分たちの手で

できることは自分たちの手で行うことが復興への近道である。また、教員はエキスパートの集団であり、一人一人がいろいろな力をもっているのだということを自覚しておく必要がある。

できることからやっていくうちに、地域の人や行政側も支援してくれる。だからこそ、まず、走り出すこと、走りながら考えることが大切だと感じる。

(6) 保護者・地域の方との連携

常時はもとより、非常時においては、保護者や地域の方との連携が特に重要である。特に、保護者に対しては、新たな情報を常に発信するとともに、保護者の意見を取り入れていく柔軟な姿勢が大切であると考えている。

(7) 結びに～人生には無駄なものはない～

今後もいろいろな災害は起こるであろう。しかし、転んでもただでは起きない、そこから何かを得て立ち上がる。これが、子供たちの今後の人生に生きてくると思う。子供たちは、次のように述べている。「3.11の大震災は、苦勞したけれど貴重な体験だった」と。人生に無駄なものはない。必ず何か意義があるのだ。

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- 管理職には、いざという瞬間において、最善の行動を即座に選択できる決断力を身に付けることが、何より重要であるということ学んだ。さらには、教職員にも、その能力や感覚を身に付けさせることが大切である。そのために、各学校において様々な場面を想定した避難訓練やシミュレーションを行って、一人一人に緊急時の対応について考えさせるような研修を実施することが必要である。

【三鷹市教育委員会統括指導主事 栗原 健】

講演10 「福島県の現状と再生に向けて～風評被害に係る分析と対策～」

講師 (財) 福島県観光物産交流協会 観光部統括部長
黒澤 文雄 氏

日時：平成24年5月24日(木) 15時15分から16時00分まで
会場：福島県郡山市民プラザ 会議室



黒澤 文雄氏

1 講演のねらい

福島県は、東日本大震災から1年以上経った現在でも、「地震」「津波」「原発事故」「風評被害」という四重の苦しみと直面している。その大変厳しい状況の中で、県の誘客事業を行っている福島県観光物産交流協会の黒澤文雄氏から、被害の現状と再生に向けた取組について直接話を聞くことにより、風評被害に苦しむ福島の人々の思いや願いを知る。

2 講演の概要

★講演記録の詳細とプレゼンテーション、写真を「指導資料(DVD)」に収録

(1) 観光市場の大幅な縮小

福島県では、震災によって200万人以上、宿泊者が減少してしまい(平成22年度780万人→平成23年度570万人)、観光市場の大幅な縮小に苦しんでいる。しかし一方で、この程度でよく収まったという感もある。その理由として次の4点が考えられる。

- 原子力発電所事故からの避難者(約15,000人)が福島県の旅館・ホテルに150日程度宿泊したため。
- 乳幼児の健康面を保護することを目的とした国の事業の存在があったため。
- 放射線の高い地域(中通り、浜通り)の住人が、比較的低い地域(会津方面)で余暇を過ごしたため。
- 東京都をはじめ全国の自治体の支援事業が、一定の宿泊者数を生み出したため。

(2) 福島県の被害状況

- 人的被害：犠牲者2,417人 行方不明者45人 重傷者20人 軽傷者162人
- 住家被害：全壊20,574棟 半壊67,943棟 一部破損155,146棟
- 被害総額：9,512億円
(内 農林水産関係の被害額2,753億円 公共施設等の被害3,162億円 商工関連被害額3,597億円)
- 転校児童・生徒数：県内他市町村へ 小学校2,791人 中学校1,464人 高校843人
県外へ 小学校5,930人 中学校1,726人 高校1,085人
- 臨時休校：小学校8校 中学校4校
- 間借り・他施設利用校：小学校24校 中学校10校 高校8校
- ※ 被害の全体像を把握するのは大変困難である。放射線による人的被害や精神的苦痛等、数字化できないものも多々ある。

(3) 福島県を襲う、原発事故による風評被害

福島県には、現在、地震、津波、原発事故及び風評被害という苦しみがある。

【直接的な風評被害】

- 農林畜水産業：県産作物の入荷拒否、価格の下落
- 製造業：加工食品の納入拒否、取引先による残留放射線の測定要求、原発事故発生前の製造加工品の納入拒否



福島県が直面する四重の苦しみ

- 観光業：県内の旅館・ホテル等のキャンセル続出、観光客の激減、観光関連産業の減収
- 偏見による被害：「放射能がうつる」と言われた避難児童、福島からの避難者の受け入れ拒否、県内大学の合格者が入学を辞退、福島県への人事異動を拒否する事例

【風評被害が生む、さらなる問題】

- 企業や大学等において、人事交流が止まることにより、新しい優秀な人材が入ってこないという事態が生じている。これが復興をさらに難しいものになっている。
- 行政は、復興に向けての取組に精一杯であり、県外へ避難した人たちへのサポートが課題である。

(4) 「生きる力」を育てる、福島の「旅育」。その回復に向けて

原発事故による風評被害は、教育旅行にも大きな影響を与えている。福島県では、平成20年度から「旅育」という言葉を使って、教育旅行の推進を行ってきた。地元の専門家による出前講座で事前・事後の学習をサポートする、宿泊や体験活動等において子供たちを安全に受け入れる体制を整える、子供と地元の人々との心の交流を重視した学習プログラムを開発する、県内の情報を一括管理して問合せの窓口を一本化する等の工夫をしており、学校や教育旅行会社から大変好評を得ている。

教育旅行における年間宿泊者数は、平成21、22年度ともに70万人を越えていたが、震災を機に関東圏の多数の学校からキャンセルがあり、宿泊者数が大幅に減少して深いダメージを受けている。

そのような中、栃木県のある中学校が、「震災後の今だからこそ、震災について学び、命や生き方について考えることが必要だ。」と福島県を訪れてくれた。初めは、「福島は放射能で怖い。行きたくない」と言っていた生徒たちであったが、学習を通して、「この震災は他人事でないと感じた。」「積み重なったものがゼロになっても、諦めずにがんばることが大切だと分かった」「自分にも何かできるのではないかと思った」等、意識や認識に変化が見られた。これを一つの事例として、今後も実施していきたいと考えている。

(5) 福島県だからこそできる、防災教育プログラムの構築を

放射能被害の問題等は、震災に遭うまで全く予期していなかった。今、思うのは、これまで学校や企業で行ってきた避難対策には課題があったということだ。この教訓を生かして、地震、津波、水害、火災等、防災に関わる一つ一つの内容について何が大事かということを見極めたいと思っている。

市民や行政が、3年、5年、10年後を見据えながら連携し、防災キャンプ体験やエネルギー学習等、福島県ならではの防災教育プログラムを構築していくことが必要である。

福島県民は、新しいビジョンに向けて歩き出そうとしている。是非、協力をお願いしたい。

3 今後の防災教育の改善等に向けて

- それぞれ課題を抱えている中、復興に向けて取り組んでいる姿に感銘を受けた。短期・長期的なビジョンを見据えた地元、観光、教育、行政など様々な立場からの見方を学んだ。

【墨田区教育委員会指導主事 小坂 裕紀】

- 我々ができることは、教育現場において、風評被害を招くような誤った情報ではなく、正確な情報を学校、地域に提供することで、子供たちの教育のため、日本の復興のために行動していかなければならない。

【荒川区教育委員会指導主事 八尋 崇】

- 詳細なデータで、福島の現状が改めて分かった。東京に住む者として被災地に何ができるのか考えさせられる内容であった。

【板橋区教育委員会統括指導主事 齊藤 浩雄】

- 当事者となっている方の訴えから、風評被害の実態がよく理解できた。施策においても教育においても先入観をもたないようにすべきだと強く感じた。

【国立市教育委員会指導主事 荒西 岳広】

今後の防災教育の改善に向けて 〈参加者の声〉

印象に残った講演、内容等

- 今回の視察では、災害が発生し刻々と状況が変化する中で、状況を冷静に判断し的確な指示を出した何人ものリーダーから実話を聞くことができた。都立高校では今年度、防災教育推進委員会を全校に設置するとともに、一泊二日の宿泊防災訓練を実施している。本研修で収集した資料等を全校に情報提供するとともに、課内指導主事にも伝達研修を行い、校長連絡会や学校訪問等の機会を捉えて、各都立高校の実態に即した実践的な防災教育を充実するための指導・助言を、組織的に展開していく。
【東京都教育庁指導部高等学校教育指導課統括指導主事 佐藤 聖一】
- 阿部和夫先生が講演の中でお話された、「被災地 石巻という見方だけでなく、歴史の街 石巻等、多様な視点で石巻市を見てほしい。」というメッセージが心に残っている。被災地の方々が未来に目を向け、自分たちの街の復興に向けて力強く歩み出していることを感じて胸が熱くなった。この研修で実感した、被災地の方々の思いや願い、努力、知恵、たくましさ、担当する「地震と安全」の作成・配布等、安全教育班の業務に生かしていく。
【東京都教育庁指導部指導企画課指導主事 千葉 かおり】
- 福島県四倉の仮設「道の駅よつくら港」。地元の初老の男性と話をした。東京から来たかと告げると、男性は「線量は、気にならんね？」と尋ねた。言葉に詰まった。しばらく沈黙が流れた。「まあ、ここは何十キロも離れてるから」誰にともなく男性は言った。「東京の子供たちに、きちんと事実を伝えます」そう言うと、「よろしく頼みます」と男性は頭を下げた。あときの約束を、果たしていかなければならない。
【東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事 吉川 泰弘】
- 門脇小学校や谷川小学校の現状を見て、被災の大きさを改めて感じた。また、阿部和夫元教育長や菊池和夫さんからの被災当時のお話にも、非常に心を打たれた。「子供の笑顔は復興のエネルギーである」という言葉から、子供の力、そして学校・教師による教育の力を感じた。
【東京都教職員研修センター教育開発課指導主事 吉川 正】
- 東松島市立宮戸小学校の実践で、未来を志向する指導に敬服した。私は昨年7月に宮城県を訪問したが、その時とほとんど変わっていない街の姿に、被災の大きさを改めて感じた。今後、所内研修会等において、学んだことを伝えていく。
【東京都教育相談センター指導主事 久保田 哲司】
- 3日間の被災地視察研修を通して、大きく2点学んだ。1点目は、「地域を知り、歴史から学ぶこと」である。阿部和夫先生は、地域の災害に関する歴史を学ぶことの重要性を語られていた。2点目は、「校長のリーダーシップと日々の生活指導の大切さ」である。鈴木洋子先生は、発災直後、先頭に立って教員に指示を出し、状況に応じて避難場所を変えながら、全校児童を安全な場所へ避難させた。この2点を踏まえ、首都直下地震に備え、防災教育の充実、学校組織力の向上などに日頃から意図的・計画的に取り組む重要性について各学校に伝えていく。
【文京区教育委員会指導主事 安部 忍】
- いわき市立湯本第二中学校では、74日間に及ぶ避難所の運営全てに、今回の震災の困難さが現れていた。次から次へと、今までにない判断をしなければならぬ。今、自分に何ができるかを考え行動に移していたことに感銘を受けた。
【江東区教育委員会指導主事 東條 貴史】
- 石巻市立門脇小学校で、東日本大震災当日、児童や教職員が駆け上った避難経路を実際に歩くという体験ができたこと。鈴木前校長先生や震災当時の教職員の皆様の計り知れない苦勞の一端を知ることができた。
【大田区教育委員会指導主事 桜井 健一】
- どの講演・視察においても、重要なポイントとして共通しているのは、管理職のリーダーシップと決断力である。防災意識を向上させる取組が必要だと感じた。さらに地域の実態に合った実践的訓練を実施しなければならない。
【足立区教育委員会指導主事 木田 義仁】
- 地域と連携した避難の大切さ、学校における日頃からの準備、被災した石巻日日新聞社の記者としてのプライド等が強く印象に残った。また、市教育委員会としても、事前アナウンスや情報伝達についても考えていきたい。
【昭島市教育委員会指導主事 稲富 泰輝】
- 航空自衛隊松島基地 大泉氏の講演にあった、組織的危機管理についての話が印象的であった。全員の理解（納得）のもとで行動することの重要性を認識した。
【国分寺市教育委員会指導主事 平田 学】
- 東松島市立宮戸小学校の取組の経過と、今後の方針の講義が印象に残った。教育の持つ力の大きさ、与える影響の大きさを改めて学んだ。
【東村山市教育委員会指導主事 木下 信久】
- 自分の身を守ることの大切さを学んだ。地震、津波、その直後の火災に対し、また、原発に関する緊迫した話を直接伺えたことが貴重な体験となった。被災された方の言葉はどれも重く貴重である。人の「いのち」について、改めて考えさせられた。指導主事として何ができるのか、考えるきっかけとなった。
【福生市教育委員会指導主事 田村 亜紀子】

- 災害時における消防の働きの重要性が理解できた。大震災時の「公助」の限界とともに、「自助」、「共助」の必要性を改めて感じた。学校と地域とが協力して「自助」「共助」の力を高める取組を考えていきたい。【多摩市教育委員会統括指導主事 石井 正広】

研修に参加し、防災教育に関する考え方が変わったこと

- 実地研修の重要性がよく分かった。各学校の管理職にも本被災地視察研修と同様の体験をしてほしいと感じた。防災だけではなく、危機管理全般についての意識が高まると思う。【目黒区教育委員会指導主事 片山 順也】
- 本研修は、防災教育の意識を高め、効果的な取組実現の動機を高める機会となった。この成果を、本区における安心・安全を最大限実現できるための防災教育の充実に繋げたい。また、被災地に対する継続的な支援を続けるとともに、「被災地の現実」を各学校等に発信し続ける必要があると感じた。【中野区教育委員会指導主事 加藤 雄一】
- 子供たちの命を守るためには、各学校が、毎月実施している避難訓練等で何を行うべきかを改めて考えていく必要がある。また、日頃から災害に対して適切な準備を行い、緊急時の情報収集の方法、何を根拠に判断を行い、どのように行動をするのか等について、具体的に考えておかなければならない。【豊島区教育委員会指導主事 齊藤 光司】
- 被災地の方々の思いに触れ、現在行われている安全教育を改めて見つめ直す必要を感じた。特に、学校安全計画の見直しについて徹底していきたい。また、災害について歴史から学ぶことの大切さや避難訓練の改善等、今回の視察で学んだことを各学校に伝え、これからの防災教育に生かしていくことが、被災地の方々の思いに応えることになると考える。【府中市教育委員会指導主事 国富 尊】
- 3日間の研修で受けた様々な講演の中で、「リーダーシップ」「組織力」「状況把握」「出来ることを行う」「風化させない」という言葉が印象的であった。この研修を生かすことが私の義務であると感じた。【調布市教育委員会指導主事 小坂 力】
- 学校管理職として、命を懸けて学校を守る覚悟ができてきているかを問われていると強く感じた。教職員自らが被災した状況下において、目の前の子供たちを守り抜く教職員の意識の高揚と体制作りが急務である。【東久留米市教育委員会統括指導主事 末永 寿宣】
- 管理職の判断・決断がどれほど重要であり、かつ、難しいものであるかを強く感じた。各先生方の講義の内容は、私自身が現地の状況を見たことで一層重みと実感をもって拝聴することができた。また、避難訓練の実施方法の改善等について考えていく必要性を感じた。【武蔵村山市教育委員会指導主事 勝山 朗】
- 3日間の視察研修は、限られた経験であったかもしれないが、実際に被災地を視察した私自身が伝承者であり続けたいと強く思った。本校の置かれている状況を踏まえた防災教育を推進していく。防災教育が各教科等の関連で継続的に深められるように、実践化に努めていく。【小笠原村立小笠原小学校長 吉岡 俊幸】

今後の防災教育の改善等に向けて

- 消防署との連携を一層深め、専門的な知見からの指導を受ける。内容としては、地震発生時の対応の仕方、地震後の適切な避難行動について、火災発生時の対応の仕方、応急救護法などが考えられる。また、各学校が計画的な安全教育を実施する中で、消防署員をゲストティーチャーとして招くなど、専門機関との効果的な連携について推奨していきたい。【中央区教育委員会指導主事 柄澤 武志】
- 災害現場では、公助として人命救助、消火活動に取組む消防・自衛隊でさえ困難を極めていた。今後は、各学校単位でも、区防災主管課、消防、警察、地域（町会等）、教育委員会等で連携し、各組織の被災時の動きの確認等を行うことが肝要であると痛感した。【品川区教育委員会指導主事 渡邊 英晴】
- 本研修を通じて、今後の防災教育改善の視点として、4点確認できた。①地震・津波等のメカニズムや災害の歴史等の理解、自分の命を守るための避難訓練の改善等、防災教育を一層充実させること。②保護者や地域、行政等との連携を強化し、地理的環境を考慮した避難経路を検討すること。③全校児童・生徒名簿等、災害時に必ず持ち出す物品を確定し、校内で共通理解を図ること。④困難を乗り越えるための災禍に遭っても生き抜く力の育成等、授業の充実を図ること。【世田谷区教育委員会指導主事 栗林 大輔】
- 地域として、学校として、災害にどう対処していくか、視察研修を通して2点の提案を考えた。①二次避難場所までを含めた避難訓練の実施（初期行動開始の判断のタイミング、情報収集要領、想定外におけるプランの変更など教職員に対する訓練）、②地域と一体となった避難行動訓練の実施（一時集合場所として学校に避難してくる住民等への対応、行動統制を取るための指示系統等についての共通理解の形成）についてである。【渋谷区教育委員会統括指導主事 松田 芳明】
- 東京都で震災が起こった場合をよく想定し、学校のある土地やその周辺の状況を実踏し、その地域の弱点を十分に把握し、災害が発生した時の判断に生かすことが必要である。災害時に危険と思われる場所は、日頃から児童・生徒に伝えておくことも重要である。また、大曲小学校の事例から、学校は災害時には、従来の想定外のことも起こりうることを想定し、ハードルを高く設定して防災体制の見直しを行い、例えば、避難訓練は日頃から積極的に地域と連携を図って実施していく必要があると分かった。【あきる野市教育委員会指導主事 加藤 治紀】

参加者名簿

番号	教育委員会名	職名	氏名	班	備考
1	東京都教育庁指導部	指導部長	坂本 和良	A	1日目参加
2	東京都教育庁指導部	主任指導主事(安全教育担当)	石田 周	A	団長
3	東京都教育庁指導部	主任指導主事(情報教育担当)	泉崎 直之	B	副団長
4	東京都教育庁指導部高等学校教育指導課	統括指導主事	佐藤 聖一	B	司会
5	東京都教育庁指導部指導企画課	課務担当係長	西脇 良和	B	事務局長
6	東京都教育庁指導部管理課	経理係	富田 知絵	A	会計
7	東京都教育庁指導部指導企画課	指導主事	千葉 かおり	A	庶務
8	東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課	指導主事	吉川 泰弘	B	庶務
9	東京都多摩教育事務所指導課	指導主事	浅野 あい子	B	記録
10	東京都教育庁大島出張所	指導主事	幅 健司	A	記録
11	東京都教職員研修センター教育開発課	指導主事	吉川 正	B	記録
12	東京都教育相談センター	指導主事	久保田 哲司	A	記録
13	千代田区教育委員会	指導主事	山本 一之介	A	1班
14	中央区教育委員会	指導主事	柄澤 武志	A	1班
15	港区教育委員会	統括指導主事	白石 亨	A	1班班長
16	新宿区教育委員会	指導主事	波多江 誠	B	2班
17	文京区教育委員会	指導主事	安部 忍	B	3班
18	台東区教育委員会	統括指導主事	杉渕 尚	B	3班班長
19	墨田区教育委員会	指導主事	小坂 裕紀	A	4班班長
20	江東区教育委員会	指導主事	東條 貴史	A	4班
21	品川区教育委員会	指導主事	渡邊 英晴	A	1班
22	目黒区教育委員会	指導主事	片山 順也	B	2班
23	大田区教育委員会	指導主事	桜井 健一	A	1班
24	世田谷区教育委員会	指導主事	栗林 大輔	B	2班
25	渋谷区教育委員会	統括指導主事	松田 芳明	B	2班班長
26	中野区教育委員会	指導主事	加藤 雄一	B	2班
27	杉並区教育委員会	指導主事	薩摩 博之	A	5班
28	豊島区教育委員会	指導主事	齊藤 光司	A	5班
29	北区教育委員会	指導主事	島野 歩	A	5班
30	荒川区教育委員会	指導主事	八尋 崇	B	3班
31	板橋区教育委員会	統括指導主事	齊藤 浩雄	A	5班班長
32	練馬区教育委員会	指導主事	三沢 亘潤	A	5班
33	足立区教育委員会	指導主事	木田 義仁	B	3班
34	葛飾区教育委員会	指導主事	伊藤 健治	A	4班
35	江戸川区教育委員会	指導主事	守谷 暢明	A	4班
36	八王子市教育委員会	指導主事	田島 由紀子	A	7班
37	立川市教育委員会	指導主事	堀田 智暁	B	8班
38	武蔵野市教育委員会	指導主事	谷合 みやこ	B	10班
39	三鷹市教育委員会	統括指導主事	栗原 健	B	10班班長
40	青梅市教育委員会	指導主事	手塚 成隆	B	6班班長
41	府中市教育委員会	指導主事	国富 尊	B	10班
42	昭島市教育委員会	指導主事	稲富 泰輝	B	8班班長
43	調布市教育委員会	指導主事	小坂 力	B	10班
44	町田市教育委員会	指導主事	長田 猛	A	7班
45	小金井市教育委員会	指導主事	高橋 良友	B	8班
46	小平市教育委員会	指導主事	志村 安	B	8班
47	日野市教育委員会	指導主事	長崎 将幸	A	7班
48	東村山市教育委員会	指導主事	木下 信久	A	9班
49	国分寺市教育委員会	指導主事	平田 学	B	8班
50	国立市教育委員会	指導主事	荒西 岳広	B	8班
51	福生市教育委員会	指導主事	田村 亜紀子	B	6班
52	狛江市教育委員会	指導主事	横田 稔	B	10班
53	東大和市教育委員会	統括指導主事	岡田 博史	A	9班
54	清瀬市教育委員会	清瀬市立清瀬第三小学校長	兵頭 扶美枝	A	9班
55	東久留米市教育委員会	統括指導主事	末永 寿宣	A	9班班長
56	武蔵村山市教育委員会	指導主事	勝山 朗	A	9班
57	多摩市教育委員会	統括指導主事	石井 正広	A	7班班長
58	稲城市教育委員会	稲城市立稲城第一中学校長	高木 行雄	A	7班
59	羽村市教育委員会	指導主事	三品 孝之	B	6班
60	あきる野市教育委員会	指導主事	加藤 治紀	B	6班
61	西東京市教育委員会	指導主事	西川 幸延	A	9班
62	瑞穂町教育委員会	指導主事	辻 和夫	B	6班
63	小笠原村教育委員会	小笠原村立小笠原小学校長	吉岡 俊幸	A	7班

東京都及び区市町村教育委員会指導主事等による
東日本大震災被災地視察研修
報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成24年度 第60号

平成24年6月29日

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
〒163-8001
東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
東京都庁第二本庁舎29階
電話番号 03-5320-6836

編集協力・印刷 株式会社城西企業